

○十五日 晴 辰五郎湯屋などにて承候かある火事場見廻り位之人夜分本所邊を歸候節狼藉もの刀を抜候もこしさを切落候と士も別當も逃去主人は馬より被引下候もひときめに逢候も右之狼藉ものは馬を奪いつ方は歟參馬は吉原近邊之寺門前に繋き有之候由又御使番とか何と歟白晝に右に類し候事有之候歟之由辰五郎申には同人子分同前之厩中間の主人被切候節狼藉もの最初に手綱を切候故いたし方なかりしよし以前承候義有之<sub>中根長十</sub>郎<sub>一件</sub>より考候に手綱には鋏のくさりを入候も可然もの之由申聞候間軍馬にはくさりいること也とて太郎か兼あつくりて部やにかけ有之候をみせしに至極と申たる故に直に遣し候も我手綱之内へ入させたりかゝる狼藉者有も近來御旗本の人々鎗劍等は不被行候も專に馬と弓のみに成行候も其人をみるに威南塘か云軍兵にならぬと云白面の少年多く成行候よりの事也何卒馬上太刀打の業劍術等專修行有度事也今馬に乗人は多し馬上にて太刀の抜おさめにても試たる人いく人かある此節の上の

御苦勞も御旗本之面々武藝等閑より起ルこと也忠義の心有らむ人は劍槍等之こと少も怠りあるへからすも了簡違候も文事のみ流れ候も其文事も行跡はよそに成候もつまらぬ文華に流れ刀抜ことも不出來様にては上にていかに思召候も此天下の挽回はならぬ也忠義の心あらむ人は一枚の書よむ暇あらは其内に武を講し度事也林大内記か朝鮮人の筆談にも日本人は武に文は余業也と申たり儒者にても如此況や武を常とする人々をや

○十六日 雨 辰五郎子分横はまを來るこれは英人此節多く馬を買入候故也四五日以來何か横はまにてこと有しよしに風聞する故に爲承たるに何事もなし水戸殿か一橋邸へ貸被遣候士五百人はかりかな川へ止宿其節百人はかり銘々手やりを持候も横はま見物としてはと場迄參候由役人差止候處穩に歸たるよし右之注進にて勤番の士及動搖候由右之外別事なしと申候五百人と云も偽あるへし十分一位なるへしされ共農兵ならはしる

へからす

○十七日 雨 松村忠四郎富塚順作來る○過日横濱の水戸殿家來押見物之義に付不法もの有はいかゝと伺に成たるに切捨候とも銃炮を用ひ候とも不苦旨之御差圖有之候由○一昨日十八ヶ條の 勅諭と云ことを聞いていさゝか風邪の砌例之心疾起候不寢よりて今日はひる寢なといたし候不不快を養ひ候

○十八日 快晴 原田市三郎久々不快に不來今日參りたるに途中おいき切に歩行ならず駕籠に來り止宿を乞○此節よめかあまりさひし氣なるをお里おもひて慰のため物見をつくらせたりけふは頻に門前に馬の足音する故に出みるに追々六七疋來る辰五郎買取候積みせ馬也辰五郎は一ヶ年によほとの内職也みせ馬之躰さすかに辰五郎は袴なれ共參候ものゝ内に紺のはらかけにて尻はし折て乗も有いろく也

○十九日 晴 原田市三郎先ッ押歸候○横田源七方は三十前後之美婦

人浪人躰之もの四五人引連候參り經濟其外之議論いたし候由其婦人殊之外弁才有之候蝦夷其外各國のこと國産之有無など迄よく存居候由也此節太平山の浪士黨之由申居候由人を附密に爲窺たるに小梅水戸の御屋敷に入候由也風聞には河津三郎太郎か弟の妾に三郎太郎の弟相果候後尼に成蝦夷に居度なと申たる女之由也

○廿日 晴風南 今晝八時過太郎歸宅也これは御供にて 御坐船へ乗候る十七日出帆十九日浦賀に御着今朝六半時品川海に御着船九ツ時濱御庭に被爲入八ッ半時前田安假御殿に 還御道中少も御別條不被爲在日々カシハン上に 御坐にて御勇武なる御事之由也

つくしのひなみ

○七月廿五日 晴八十二度 新家來る次男と相撲取たりとて腕などにあ  
さを生したり酔後相撲取へからすと申聞候新家次男十四才なれ共大男に  
あ十七八にみゆる容貌も宜人々おもひ附也馬上砲はよほと宜由かけを追  
ひ馬上を鹿を打ことを十歳はかりの時より自然と覺たりと也相撲を取家  
來共存外なるめに逢よし也劔術柔術を教こみ度少年也繩一筋有は馬をは  
いか様にも取廻すよし牧士にあよく銃炮を打也

○廿六日 晴八十度 忠四郎來る病後やせあれ共よほとよししかし九月  
も過不申候あは以前のことに無覺束

○廿七日 晴八十度 井上大坂にあ重大之事件之懸向山榮五郎一同被仰  
付候由風聞然ルに小笠圖書頭被 召登 城有大坂之御用懸と申候風聞三

人共以前之例に長州へ之御使となき様にいたし度され共万々一右等  
之事ありて死を致さは武門譽也可恐事にあらず○信濃守もはや六十には  
つか也百年もいきまし大事之御用に死ぬは仕合之内とも可申かされ共  
かけに承候は甚心痛せり

○廿八日 晴七十八度

扇より先捨らるゝ麻衣はやくもかはるうき秋の風

今朝六ツ前を足ためしたち附わらちに大棒を鈍のすし腰にひすとんを  
さし三尺貳寸之居合刀壹尺八寸之脇差を帶し居宅より庭の廻りを試歩す  
る表坐敷之戸明キ有不審いたしなから再ひ又其所に行たるに惣髪の人戸  
の明たる所より半身を出し拙老をしけくくと怪むけしき拙老も又かれを  
怪しみたる故に近よる頃其人は内へ入たり直に家内之ものに承るに昨日  
太郎方の夜學に參候書生止宿之由一向に不存候互に驚たる也大笑也○  
今日廣瀬源兵衛來る御支配之もの氣受宜難有旨申之其一證也とて御用金

出來たる始末相咄御手際之事に安心いたし申候先生御武篇天下の人知  
るところ治國牧民のこと迄御行届感歎せりこれ一の忠の字を起なるへし  
忠はこゝろをつくすと申候解よく相分り申候

○廿九日 くもり七十五度 戸田左近願之通隠居被仰付家督は戸田謹吾  
へ被下候旨被仰渡候由今日爲知來る右に付謹吾居屋敷へ怡之使者遣し候  
使者歸候之咄には謹吾住居奥向厩等此節普請最中之由よほと之事と  
聞へ候妻は阿部大學分家之娘相定り謹吾歸宅早々引取候積之由土藏長屋  
其外にてはよほと之事なるへし謹吾留守中知行之もの打よりいたし候事  
なるへし一向不存候あまりに世話のなきも手もち無沙汰なるか如ししか  
し一々世話やけ候は百段よろし

○晦日 晴風八十度 七月五日御認之巨細之御書并御別番四冊編年壹冊來  
る且椎茸被下千万奉謝候御別番拜願之心得に一覽殊之外長坐之客と閑  
話の如しみなつまり歎息杞憂而已也半日かゝり候よみ申候○今日孫子

用間篇をよみ候處五間俱起莫知其道と有いろくの風説を合みねは事實を得かたければ也非聖智不能用間と有これにて其六ヶ敷を知申候用の字おもしろし用ゆるとはよく遣ふ也此方くらければ不能用して却る間に遣はる也用ゆるの尤以味あることなり

○八月朔日 朝晴七ツ時を雨 當年二百十日二百廿日八朔ともに前日は風也故に害なし昔より申候あれ日と申こといはれあること也蒙古の軍艦碎けたる大風弘安四年八月朔日かと覺申候

○二日 晴朝は六十五度に成○かな川定番役鈴か森に被殺此節品川邊度々人殺に夜分往來なし

○三日 晴 池田近所之御勘定奉行へ乗切に参候由新家次男見受候る乗手と申馬と申別段也と之咄也拙老は何か急なる變事にも出來候歟と驚申候みる人により心附違ふもの也併何事も不承候江戸町中は靜也○青

木一件芝居にてもいたし一枚畫にも出候由當人いまた不白狀石を七枚迄だき妾は四枚に白狀せしか青木は少も申さすと之事也

○四日 晴 今日新家へ遣したる脇差をみるに平合のはき破たるを直し有何故と承たるに熊を打たるところ止りは止りたれと猶働く故にゑくりたるに其節はき合せめ放れたり其時はどこを損したるかしらさりしと也はきは平合をよくいたし候上に金か赤銅かをたしかに可着事也熊に逢疵受血出るとき其熊の血に洗へは血とまりいたみ所即坐に直るといふなり新家椎茸を多くるゝ故になまの茸に大毒有といひしに一向不知夥干ス内に一向にかはかす其まゝくさるもの有みな虫となるよし夫は鶏も不食夫にやと云必夫なるへしなま椎茸心有もの決る食すへからす伊豆の湯ヶ島村は椎茸を作るところなり生椎茸に當りたるもの有やと承るに會ふなしと云所にもよるなるへし

○五日 雨 榊原主計頭御用召々處卒中風に相果候由○新家近々出立

に付相招酒は左衛門尉か七八人前はのむ也横濱を直太郎新家にはなむけを送りたりと之吹聴立派なること三兩も可懸かこ蒲團也これも御かけに亦定番役勤居候故也出府之節宜時けいを鏡作へおくり同人大悦也孝行之  
一ツ也直太郎あまり錢も不遣とみえたり○新家取立牧場に馬三百余出來今迄御拂に相成候も不少事之由也

○六日 風雨午後止 内藤豊太郎兎角病氣直り兼候由豊太郎はとし若也幸三郎も同病也こまりたること也右之取込故例之短刀今に不出來

○七日 雨 此節米直段三斗位を貳斗五升までのよし○謹吾を便有同人健之由梅干一ツ之御賄を頂戴するよし也

○八日 雨午後晴 新家狩人同前之なくさみに付此度いろくくと鏡炮を作り申候其内太田道淳翁抱之炮匠か造たるにかな物并バネに至る迄新工夫道淳考にて眞鍮と精鍮とを合せねりたるかねに亦出來申候右かねに亦つくり候バネはためしたるに千發打たれ共少もいたみ不申候由也少々並之

眞鍮は色變居申候新家來鏡炮を製作いたし申候鍊精鍮に亦火門をつくるに手間かゝり候處生かねに亦造れは一日に夥出來候それをタンソにて燒候處及かねの如くに相成候由トカケの色に似たる青さびなと容易なること也トントロ數年貯置候亦變し不申候仕方等みな此度新家來傳授受候亦歸申候新家之鏡炮其家來仕立たるをみる立派なること也大力に亦酒呑こと一度に三升に及ふと云奇人也

○八月九日 快晴朝六十二度 時候相應也木犀の花さき秋の草花はいさゝか末也これにては當年彌豐作也難有こと也只諸色日ことに高く驚入ことのみ也金子を出しても輕節などは多くは賣不申候手拭一筋三百文也○太郎方のフロイセン出來之もとこめケヘル來る木綿針つの如くなるものに亦突打にする也極よく當るよし初心之ものにもはつれ不申と之事巧妙之細工驚申候イキリスと戰爭之節右に亦大勝いたし候由夫故イキリス人は賣不申とフロイセン人申居候と之事也

○十日 晴 幸三郎久々に來るやせ候而髪などハツといたし可憐躰故叱り之事少もなし平常は禁酒之由也しかし拙老の相手いたし候様とて爲給候處酒食は例に不變申サハ老こみたと申様なるさま也越中島調練廻り候と之事故つかれたる故もあるへし

○十一日 晴 新門の辰御呼下に相成候由前に記したり江戸にて評判すること也御抱屋敷近邊植木屋に承れば大罪人に付齒をもぬかれたるよしなど申候此節承に御呼下に相成候由等曾而跡方もなき事也と又申觸候いかさまも左もあるへし此節の風聞往々此類也

○十二日 雨 新家鏡作無滞今日出立なりかこへ馬上炮を入侍三人鏡炮をワツツクにかけて脊負たりいつれも馬と鏡炮は屈竟なるもの共也平生江戸にゐは不被遣面々也次男順次郎馬に參るこの兒十四才なれ共十六七之如し至穩なるよき兒也人々蝦夷へ遣すを惜む馬上鏡炮よほとよくいす七八才位か竹内下野守廻浦之節見分に出牧場に砲并馬よろしく出

來候由に而褒美を遣したるよし下野守家來を先年承りたりこれは江戸にもおかるゝ人物也男よけれ共箱館を去ること六七十里之場所故女之氣遣なきは當人之幸也よほと力有相撲なととる也往々よき士となるへし

○十三日 晴夕くもり 榊原御用召御勘定奉行と之風聞頓死之説止たり

○井上の書狀出す則私に御狀相廻し申候

○十四日 くもり 異人之ミンストル館あたみ其外二ヶ所へ出來候由此末いかゝなるへき○異國人之小遣に成居し日本人實は長之廻し物に而被召捕吟味之上牢間等有之候など申候まことにや何か被召捕候者有とは申せとも長州之廻し物とはおほつかなし

○十五日 快晴 八月十五日夜にかきり候而千里同晴雨と申こと五雜俎などにもみゆる也或年友野霞舟兼而催しに而霞舟翁は江戸淺野中書はうら賀拙老は奈良に而同韻之律詩を作りたり追而合みれば江戸うら賀は晴奈良は終日終夜雨也から人かゝることには偽多し○昨夜寄合肝煎廻狀に

つくしのひなみ (慶應元年八月)

四百十

十四日寅剋 觀行院様御逝去に付來る五日迄鳴物停止なり月見に絲竹の聲會もなく八幡祭太鼓のおとさへなしといくゝ寂寞なること也あやにくの清光可怨西國へ御達しの及ふは當月下旬なるへければ大原八幡の祭など不相替にきやかなるへし

○十六日 晴昨夜徹夜快晴也めつらし○榊原主計頭御用召之御奉書來り無間も頓死無相違忤出立と之事也貧乏之義等承候る大に驚其上驕奢也何歟江戸町之出入之新潟之もの引合有と風聞ス

## 東洋金鴻

慶應二年

○寅十月廿一日 快晴風 太郎英國留學生取締としてロンドンへ參候積に而神南川横濱へ向六半時出立

七十病翁殊愛孫 即今心緒暫休論 老爺雖耗猶豪氣 談笑從容爲盡言  
雖腸寸斷恍如鶴 強述一言纔致情 夢裡晨昏毫不怠 忘家爲國盡忠誠  
こたひつくりたる太郎か肖像へ

錦着て歸りし後に彌まさる其像書をなほみむと待

高子よめる こたひ英國に物學ひの仰蒙りて行給ふ別によみてまいらす  
ことくによくまねひ得て歸りませかの古事の機衣に似す  
故里はおもひ忘れて忘れぬはたゝ君の爲世の爲のこと

東洋金鴻 (慶應二年十月)

四百十一



神な月しくれかちなる別には中／＼いはむ言の葉もなし

○廿二日 晴風 石川獻藏其外來る井上も使有横濱一昨日の出火に太郎の出立もしや延引かと云○針醫并祐玄來る少々同篇中不出來也と云少も當らぬ積なれと腹へは響たりとみゆこれ人間之當り前也

○廿三日 晴風 昨夜勘一横濱を歸り來候而其許之御書狀即刻返書相渡○箕作を來る金子今朝勘一出立暫爲待置候處申遣候通來候間則相渡候而勘一出立爲致候○家來共へ渡し置候知行所書物御金藏納證文并看板等有物泰助立會正藏明細に取調差出則一覽之上正藏へ相渡泰助歸候は、外有物も爲調同様にいたし候積

○廿四日 快晴 昨日箕作を金子三十兩來る七十匁と端金不足也其旨受取書いたし候而勝藏を遣す今日豹藏を土産之由に而奥井隱宅へ錫之壺くる、茶半斤ッ、も入へし豹藏へは着之肴兩方を金百疋遣し候積○長州之戰爭を聞に頭立たる人如何もあるへけれと頭を悪口いたし其外頭に勇氣

有て進まむと云を只一人捨置深夜に成たりとて歸る其内に而五六人は頭を捨殺にいたし候は如何とて立戻候由是等之賞罰無之候而は不相成然ルに其人々知れ居なから一向沙汰なしに而濟候由西洋軍法はかゝるものとみえたり岳飛は智仁勇嚴の一ヲかき候而は軍は不成と申たるにはいたく相違せり漢人と違ひこれに而も軍出來るとみえたり英國に而は如何承り度候今般騎兵も參りたれと右は注進之外遣はぬこと、心得居候かと聞ゆ三兵タクチイキのラントの説とはこと也

○廿五日 快晴 貴志を留守見舞來る○昨夜は熊次郎參候而中之口に勤番也同日有馬帶刀戸川播磨守小笠原攝津守等其外御用召多人數也有馬は信濃守名代也攝津守は麻上下也詳なることは未聞して歸たりと云○厩之者辰五郎話に別當に成て半年居らねは其もの之善惡不知然ルに御役人直にかはり申候嚴敷こと也御目かね別段故也別當風情之了簡に而は驚而感服すると申たり久須美老人話に若キ時に遊女を買てみるに壹分は壹分貳

朱は貳朱と別直段たけを差別急度わかる也川路なとよき役人にならば女郎の人撰のことくせよと申しき

○廿六日 晴 昨夜良右衛門歸候を委細に横濱之始末申聞異人共も別段に取扱候由申聞且御直書良右衛門が夫々の差出英人宜人物之旨旁以安心候○平澤來る出立已來脈に動き相顯たるに今日に全よしと云昨日尾大參候を腹之拘牽大によろしと云少々肉附たるは誰もみな云也御安心あるへし昨日之御役替大目付神保佐渡守御留守居木下大内記御軍艦奉行矢田堀景藏御軍艦頭御目付今堀登よ太郎遊撃隊頭并寄合駒井相模守町奉行御手洗乾一郎炮兵頭並朝倉播磨守龜之助殿家老増山對馬守田沼玄蕃頭御役御免元席御側久永石見守酒井備中守菊之間椽頼詰御留守居戸川播磨守町奉行有馬阿波守御勘定奉行小笠原攝津守御作事奉行松平備中守大久保肥前守龜之助殿家老鳥井越前守以上六人勤仕並

○廿七日 くもり 御見送いたし候家來共歸り來并御直書之趣に今般

公儀に之御手當厚に感服せり此節御用途多之御中にはつか十人前後之人に年に万金以上之御費を不被爲厭外國に被遣何差支なき様に御手當あるはこれ何之爲そや 御上之御一身に被爲取候は一毛の御樂にも不成唯々 日本之人に智力を開キ武威盛に可被成と之思召たるは勿論也右を容易に心得居或は議論を生し或は頑乎として舊染を是とし守はこれはいかなるころにや然ルに其御用被仰付候も懈怠いたし甚敷は長崎などに或は遊蕩なるも有しよし可歎不忠といふへし太郎など此度之御入用之内不用之減を附一々書面にいたし壹人壹ケ年御入用何程と定年々留學生之三四十人も出來る様にいたし候は、忠義一ツなるへし正直にいたし候儉約之入用に臨時之見込一割と歟二割と歟立被遣不申候はつゝき不申候

○廿八日 くもりしくれふる 船中は刀を英に預り脇差はかり之由短刀一本に而陸地を歩行するは心細こと也これに而兼而申通短刀の不要害なることを可知若取よせ候事出來候は、便に御申越可被成候 御上洛

之節御用ひ之長脇差にも可相廻候尤歸船中而已なるへければ急事にあらず

○廿九日 快晴 昨夜四ツ半時麴町并小川町邊出火風烈敷西北風なれば更に氣遣ひなけれ共留守中に付人を不出今日見舞之人を遣す麴町は丹羽之屋敷脇小川町は表神保小路也知ル人に焼類なし○井上に家來共調練に付銃炮借に来る門外不出之積なれ共外とも違候間並ケヘール四挺貸遣す紛不申ため急に小なる焼印を買候而右を押遣し候井上を太郎は用立置候ミニフケヘル返却之義申來る一向不知改メみしに元來長キミニフ挺少し短キニフ有筈之處長短壹挺ツ、有て壹挺不足也井上を借用を申はなし其旨申遣し英の承候而之上之旨返事遣す此こと否承りたし序に云先達而自分金子貳十兩差出買候蘭書書なし金子手元になし拂に相成候事か○卅日 くもり 昨夜も航海いかにやとおもひ候に付考候得は太郎幼年之節此程之身分に成候迄御役望に付熱中奔走の苦をしらす此苦先ツは

早くて五六年は有也金錢の苦をしらすこれ又よほとこの事也右之二事をしめに苦勞拙老井上などの百分ケ一もなしよりて行末を心配せしに今般之御用にも異國人相手に僕もなく單身獨歩にも數年外國に居右にもつみ亡しをする也せめてものこと也此御用に忠節を盡シ一毫の私心なくは行末全かるへし○一昨夜之出火明樂火元にも隣家之雨宮迄焼しと云飛驒守時分之物蕩盡なるへし

○十一月朔日 晴 忠四郎來る留守見舞也菓子其外くれ候健之丞上京之暇乞に來る

○二日 晴 返納金之否使者にも留守預へ承に遣候いまた不相分と事也<sup>之脱カ</sup>  
○長州之事なと承りて考るに當時之躰は昔いふ矢軍といふもの也いづれ手近之勝負ならては眞之勝負不決候備を近くつめ太鼓の音をつめ候而凡四五拾間位之處にも横隊にいたし坐立二行にも打放しては進み其節を短

くして敵を踏破へき事也英場數之士官などに能承り度事也

○卯十一月三日 風晴、井上を借用之事申來に付在來之ケヘールを改みるに知行所三ヶ村へ六挺市三郎一挺残り三挺合十挺外にミニフさひ長筒二磨短一ヶヘールに劍なきもの三挺之内に一挺有右之通に付彌井上之筒と云ものなし今日も井上の人來る太郎之否承候而及挨拶候積○昨夜西風強ハツ頃を少しも不寐いろくとおもふに此程は支那へ航海なるへしと

松浦かたひれふる山に出る月ふりさけみらんもろこしの海

來集斷腸百万兵 夢醒半夜滿愁城 忽思山海君恩厚 碎去紛々似簪怪

○四日 晴風 昨晝八時頃鮫ヶ橋邊出火に而紀州之御屋敷御長屋計少々御類焼也見舞として參候面々清兵衛并弟子共追々八九人駈附候内藤豊太郎市川弁吉父子も參る風筋宜七ツ過鎮火清兵衛方へは正月之例に見合取計候様勝藏へ申談やす忠如何哉とて今日參る豹藏も近火に付人遣し度候處今日も風に付人遣し兼候紀州奥森田へも見舞おさとを出す

○五日 晴風 昨日井上へケヘール三挺遣ス○同日例之通市三郎來る此節は隱宅之方に止宿爲致候同人咄に而は借參候銃炮はミニフケヘール壹挺也と云然ル時はこれ井上を借用之方歟然る時は並ケヘール一挺不足と成幸三郎がまた返却無之事歟かにいづれにも夫々穿鑿之積惣而西洋筒同様に付井上へ貸遣し候節紛不申様川之燒印いたし遣候害も無之に付いづれも宅に差置候分は右之燒印いたし置候積○本込ケヘール被行候而は並之ミニフは廢すへし今之内拾一貳兩ならば買手有之次第拂ひ可申歟いか、追而知行所之遣候而も可宜歟ミニフ並之筒は四五發に而キシミ長州に而困りたると之説有左も有へき歟○梅堂之子息步兵差圖役頭取被仰付近々上京之旨爲知來る奥を喜び餞別とも遣候様おさとをおはなへ申聞候○此節長州へ參候人々歸候而いろくの説有步兵共は格別之事也少に而も跡へ引候様之差圖は怒候而みな進候由感心也步兵に而討死いたし候面々は我輩之氏神也依而は渠等當分御抱之下々輩なれ共國家爲に死し

たり夫におとるましと念し候而銃炮を取扱候節に無怠可祈と今日市三郎へ申教遣し候○如予者は慕参りいたし遣し施餓鬼に而もいたし遣度位に今度おもひ居候得共不隨翁いかにせむ病床に嗟嘆するのみ也此節の咄に歩兵か銃炮打候場所と歩兵頭等居候場所は五丁余ツ、隔り居候事之由騎兵も参候得共これは所々之使而已に而何も事をなしたることはなきよし殿シリカリと申は日本流などには六ヶ敷事也探索或は物見之類至る六ヶ敷事也斥候をよく置次第漢法には六ヶ敷これに而勝敗甚多し以上等之事西洋流に絶るなき躰也イキリスに而も然りやよく御修行有へし歩兵差圖役なとは歩兵練磨之者御撰有はよかるへき敷西洋船中には國王之兒に而も修行中は船將之沓を持陸へ上り候而も跡に並ひ候由敷に魯西亞人は申せしかと承候僞にや門地に拘り候而は下役之事夢にも不知上役に初なる候事敷上に而西洋法御用ひ之上はよく御學ひ半になる似て比ヒなる事なき様に實地御修行之方敷○榊原之家老共は討死いたし候由也いつれも

東照宮を被爲附候もの共なるへし

○寅十一月六日 晴風なし 皇朝に勳何等と云こと有壺石碑にても其様子知へし正五位に五等は當る一等ならは一位に當へし勳位と云は武功によりて被下事也右に准し歩兵なども勳何當と云ことを立寄合之子に而も是非十二等位の歩兵にはしめは出し十二當は十二兩被下事ならは十一等は十三兩被下と云様にいたし右は門地之外にいたし歩兵十二等の中奥御小性にもなると云ことくになりたらは門地に而よき役に成戰爭に臨み役にたゝぬなと云こととは有まし○横田の留守頼之使者遣す看壹折遣す大なる鯛也貳分壹朱二百文なり

○十一月七日 晴風 臺所向所々くさり候由に而大工日々二人ツ、來る過日も二日植木屋來りたり壹兩はかりかゝりたるよし清兵衛方へ火事見舞之挨拶いまた不遣由早々遣し候へと勝藏の申達ス

○八日 晴 高山來る話に横濱に而日本に而西戎法に馬に麥を爲給たる

に多く病馬出来て困ると也予答に米を以考るに膏腴之地に生る麥と西戎の力と麥と肥瘠大に異なるへし然ルを書に泥み或は人真似して其事實を不詳之弊なるへし彼の長崎之者ちりめむを綿入ハン尸を江戸流行に任セ買行長崎へ歸り炎暑之時用ひし類なるへし元來海外万里甚敷風土殊なるに不心附故也太郎之類よく心を不用して學ひしまゝを用ふると同し弊に陷也

○九日 はれ風西北なり 衣類之御改革に而都而羅紗之ツ、袖羽織股引に成いつれも色は黒也役所御目上已上は白以下は黄と申こと也○菊池星野兩人共外國奉行を禁裏附小畑稻太郎奈良奉行御小納戸不殘勤仕並被仰付候由なり四五日前之事之由

○十日 晴風北西 昨夜九ツ時過三河町邊を出火今日九ツ時頃迄不鎮火淺田尾大等類焼丸之内へは不入寄場牢屋敷焼候は、井上別段之心配なるへし牢屋敷は焼必定寄場はいまた不相分候

○十一日 晴風北西 昨日類焼之人々へ見舞を出ス○四半時吉原出火也例

之通かり宅之次第に至るへし○今朝三十五度之寒と云こと也食事の時みれば四十二度也寒サ甚し○兩三日逆上にも眼氣悪しこれは附子を用ひ居ながら晝夜巨燧之方へ足を出し居なるへしよつて病床を八疊床之前に移ス寒氣甚し此節書見を廢す○表之諸道具調申付る火藥八合計有と云穴藏へヒンに入收置候様申付ル魯人へ傳へに日本人程火藥を等閑にする國なし畢竟手こりをせぬ故也とていろ／＼のことを教たり英などに而之取扱よく見覺可被申候數百万升之火藥を一ヶ所に置なと申ことは決而あるへし

○十二日 晴午後地震少々長し よめ其外隱居所に駈附る太郎兼而よく教置たりとみゆ乍序記スよめ一際によろしよく氣を附る躰也是も太郎よく申付置よく守とみえたり

○十三日 晴 井上信濃守來る殊之外いそかしと云平屋は不燒寄場は少々焼たりと云○此程人々云に寄鐘三郎を招キ不申に付井上家内などに而

異言有と云夫故譯を申開候され共事々家長に問は禮也疑似不決事有は我に問へきは太郎之禮也夫を我曾る不知と云は盡せりと云へからすと評せり事は子細なし上田作之丞留役被仰付候吹聴に来る

○十四日 晴 豹藏話に長州に於共に敵に向ひし人流玉眉間に當たるかハツフリを冠り居候故其玉轉し眉毛之邊を被破候由ハツフリの功をしると申たり勿論其人は其まゝ進み候由眉間にハツフリなくは即死なるへしと之話也

○寅十一月十五日 晴之方風 上田作之丞方は結ひ狀に於昇進之祝ひ遣ス○熱田祐庵來る初六日よき兒也○井上之ミニフ筒催促來る其書面之趣に於は太郎は藤左衛門用立出立以前及催促候得共いまた返却無之由也○幸三郎方にケヘール貸置候段無相違依る取遣す處井上は貸替上は幸三郎にも暫可貸遣旨に於返却無之候○市三郎方に太郎は借受候ミニフ壹挺有と云右を取に遣し候積○市三郎はケヘール貸置候段太郎先達を申開ル

幸三郎方之品はとく取もとし候由也○何故所持之ミニフ三挺有なから藤左衛門は借用候哉太郎取計一々不審よつて英は申遣候上と先ツ相決ス○泰助は御留守中非常其外之義に付存寄書差出ス親切なること感心せりよつて夫々存寄即刻申達ス泰助貫一共に御留守中取締よろし太郎は眼力好安心せり○泰助書面に於ハシコ一挺もなし火之粉防キ如何いたし候哉と之事尤也早々出來候様申達スあまり之等閑也○水溜もり水一寸はかり也と云大に驚此類多し獅々叟之平日しるへし

○十六日 晴 昨夜六ツ半時頃 御城之御使に於宅狀來る舉家さゝめきて安婆々迄も駈來る忙手披封候處松井源水様ト云届狀さて似たる怪敷名と評しつゝよくみれば淺草云々之肩書有彌不審す野田へ之狀有孝子之深愛可掬其内人々揃ふ御直封無恙内々日記并御狀有百事如書又似相語其内英人不可忘父母國之事を分訣に臨ての一言感伏々々醫師過食せず運動のことを云みな老拙之平日の話と暗合之よし○薩州藩士之說新に覺申候

皇國之士のこと左もあるへし其者之所贈之新聞番一枚一覽黒油に髪を  
染候ケ條を講したるに人々絶倒艦中屢風も有之候處船氣無之御大丈夫  
と之義鏡腸故なるへし感悦々々○一蝶齋源水等同船一奇と云へし歸府之  
節賀宴を開キ其時は彼もの共招たらは可宜なと申○松江之鱸魚東坡ノ故  
事を三坡之被踏候も奇と云へし乍浦に葉舟漢人に爲掉夜行は如何可恐  
々々水滸傳のとき事あらは尤以君子之所不爲と云へし○老拙之不快御  
案事之條數條相見候忝候少々宛は宜方に向候得共決る惡敷は不相成候御  
安心あるへし兼而とてもと嚴寒を覺悟いたし居候處天幸に別條なし此  
條ならば春來はひる子之神之崇も去可申歎に候○如此封印に而は一向に  
詮なし已後之ため切貫候而差進候○松江之鱸魚に而は中村詞宗驚人之吟  
有へし承度御歸府之上中村詞宗之紀行日記等世に被行番の價爲に踊貴す  
へし諸色高直之砌暗に杞憂を催せり東坡之すゞき三坡の口に入はめつら  
し

○十七日 晴 被遣候新聞番井上へ遣ス其副書に御役人之方寸之内を狹  
とおもふへからすかく四海に施せり一夕之考万世に及ふことも有可恐こ  
と也と記せりこの新聞といふものを忌嫌ふものも有て横濱の新聞を譯す  
るを禁へしとの説起りたりと以前誰やらむ話を聞し其こと有らむには塞  
蔽之極に而且大海を手に而ふさくか如し愚と云へし御役人なそには有ま  
しわか承遠か覺遠なるへし太郎心得迄に記ス○昨日良右衛門來る松井源  
水之書狀は渠とへけたしとて持行たり勿論川路家々之届物也とは委細に  
申聞たしかに可届旨に付少々酒氣有之候得共渡し遣し候  
○寅十一月十八日 晴 敬太郎六月十七日之つけ夷地へ八月廿一日に届  
き其返書今日到來一往返六ヶ月也英の便りは大にこと也往返四ヶ月には  
必可届便と不便如斯○中村先生へ誠心誠意之學教授受候哉如何夫先生と  
同行修身之一幸也○四五日書見を減ス六七日少々眼氣也尾臺云夜學をあ  
まり勤る故也と夫に付如右○朱子説に水減して洲渚を生し洲渚草木を生



し草木禽獸を生し氣化之人も出来るよし也此節西洋にもあるよし也貫一に爲見たるに唐士之智見早く開たるに驚

○廿日 晴風 中村氏近親高橋千之助太郎之世話に同氏相成候旨之挨拶に来るふり出し金米糖くる、移り小菊一束遣ス○市川弁吉来る豊之云々承る歎息しかし御心配は毛頭無之例之病ひ也其節之咄には十八日客に参り歸り懸一寸家來に斷候幸三郎ケヘール携行候趣なり太郎之御承知なき譯也○敷山徳次郎一昨日来る土産小倉袴地くれ候同人長を歸り懸長崎へ参異國船に乗薩洋に難風逢候乍去無滞着候旨に辛苦之様子相咄○桂城恒庵来る拙老之眼もはや平愈之旨申聞○公家衆數人京都之御沙汰に御預等に相成候旨之風聞其様子には中川宮之一條も風聞さして僞とも不聞歟

○廿一日 曇之方 筒袖タン袋之御制度改候由御書付はいまた不見いかなれば屢御變革有しにや詳成ことは不承候○菊池い、與守病氣に付願之通

御役御免之由

○廿二日 晴夜微雨 夜に入例之通お花来るいろく話中宅狀来る老拙讀之日記漢語草書躰且老人燈火に漸讀之香港之躰漢土之衰弱之様子相分ル學者之方御出之けしき轎に御乗候圖等詳也不覺四ツ半時頃まではなし居候

○廿三日 晴 昨日之日記等井上へ遣ス太郎今般之日記に詩と和歌有井上初みるなるへし日本ト云外は外異國同士之話不相分候由左もあるへし遠國者同士之話にも少く候其風情有は異國之話万々なるへし

○廿四日 晴 講武所は陸軍所濱は海軍所持と相成濱に住居之御家人は海軍所附に相成候由

○廿五日 晴午前地五たひ震 長峯良三郎横濱を歸候由に來る○歩兵戦亡之もの増上寺に官を法事被成下候由難有事也兼而回向院に歩兵局之もの割合出金に法事と承り拙老歩兵奉行ならば行て一番焼香する

所也といひしか前文之通に別難有王陽明之戰亡之ものを祭らるゝに  
大將たるものゝ心得をしるへし

○廿六日 晴地震再度微也 高峯良三郎太郎之機嫌聞に来る○辰五郎病  
氣全快に來る同人死を決して鐘三郎之長州往をすゝめたる躰古人に不  
愧中々以老拙など可及とは不存候○加州之家來ト薩州之人何之事もなき  
事過言いたし加人薩人を殺し薩人一席に罷在候而逃たるは主人を切腹申  
付候由いつれも長崎に參り居候書生也加人は書殘したる書など立派なる  
こと也と良三郎咄也可惜不忠不孝之罪はまぬかれ不申候○太郎英其外に  
而日本之人に逢ともよくたしかに禮を守り言語を慎み懇意にいたすへか  
らす太郎は別而 公儀之御用をかゝ居歸候而一大事之忠義有故に不實  
の説を受けるを厭ふへからす會合等決あなすへからす可恐々々同伴之人々  
少年なれば其心を以導へし

○廿七日 晴風 昨日又太郎心計之祝ひいたすに付市三郎高山之老婆を

招キ赤飯振舞おさと心附に而上之者はますきものにも多くいたし候而  
下々迄及様いたし度と之事也佛事には毎度心附たれ共祝事には其心なか  
りしかおさとか論にまかす

○寅十一月廿八日 晴 寒前のしるし有手どりくとする也○夜ことに  
五ツ前後には阿花女必來りて四ツ前迄話いたすいろくの話の序に太郎  
か閨門寂然として以前の一言之間然なし是太郎かよく慎による所といへ  
共子供之節を附添候安乳婆の功も有といひて話いたす序に彼婆云外國在  
學生之内には 皇國へ歸りかぬるも有みな婦人に感溺する起と承るかゝ  
れは參りて御世話申たき迄に折々おもふよしに而例之忠直を云也予云か  
ゝることは傳聞の誤なるへし會あきかぬ事也と申せしに阿花も聞けりと  
云り右に而出帆前英人の云しは實は其ことなるへしと心附たり本邦の人  
魯西亞などの婦人のこと戯に云ことも有と墨夷ハルリスなど會あなく云  
ことをも恥るけしき也英亦同じかるへしよりにて父母の國を忘れ給ふなど

申せしに其内に多少の味有となるへしされ共今布衣以上之御役人となり妻子も有て且一度も間然することなき人に何之氣遣か有らむしかし尤也即今は決ああるましけれと英人の云ことく長くなりて心ゆるみなどを懸念しするは尤也といひき中村氏の外は太郎はしめ少年也心附へし其上に輕きものにも人種をみたること御國禁にありしへは外國人の子はみな其國へ被遣たることシヤカラタラふみと云ものを長崎にて傳ふるにしてみるへし万一事の聞へは今も必嚴刑なるへし其こと不知太郎に非といひて婆々に話たり船長日記に魯西亞の遊女の歌有アシヤノ人を色男にもちて黒キ眼の兒を抱みたしとか有過日御遣しの新聞昏に髪を黒く染といふも其一と云へし可恐々々阿花を序に婆々か懸念の様子可申遣と申たり異國のこと昔の法は存しことはゆるみたり故に表立ときは以前之通也長崎に而今に蘭船出帆の節遊女に妊身の者なしと云書付を奉行所へ出すこと也可慎可恐此一事也食飲男女人之大欲存と云ことも有也火に似たる

もの也清少納言か遠くて近きものはと云第一に出したるわけ也男女七才不同席と聖人の定給ひしも同じこと也いと／＼嚴にすへきは此こと也  
○廿九日 晴 箱森古橋村より拂米直段壹斗貳升五合に下ケ吳候様願出森次郎ふみ抜いたし源吾左衛門は家根を落腰痛と之事也例之偽と存たるに十一月十五日相場札差を差越たるは丑年米也夫をしらす其まゝ遣したる故に地相場新米とは甚敷相違せしに申遣方不念也壹斗貳升五合に有は貳百八拾五匁也先達を御藏米新米に見合高直也故に申に任せ遣し候地頭方不行届なる也殘念をせり銃炮鑄かた序に渡し遣し候  
○晦日 晴風 野州知行所之ものを受書取之歸村申付ル札差書付粗なるに不心附遣し村役人共罷出候譯に付歸村路用貳分遣し候○貫一風を等閑にいたし傷寒に成時候當りを等閑にする程可恐事なし太郎よく御心得候へ

○十二月朔日 晴之方 極内々之由に而謹吾方に用人いたし居謹吾難義  
いたし候頃之用人來る中氣に付生涯壹人扶持暇に成候得共暮し兼候由に而歎  
願也老拙も幼年之節は 行道院様御浪人に付御附添申候而西走東奔せし  
ものに而謹吾か元家來と同じもの也病氣又同しかれば幸にして老拙も  
よし老拙ならば往來に倒れ居候乞食なるへしとおもひて頻に難有頻に不  
便に成少々金子并我平日之食料の麥なとめくみ遣したり然るに太郎は生  
なからの五百石さては當人御出精御働とは乍申此節之御身分也イカニイ  
カニくこれを以第一に 君恩を奉仰一瞬の間も御忘れなく次に父母之  
恩をおもひ英人餞別之格言をおもひ少も御油斷有へからず  
○二日 晴之方 昨日を寒中尋として人々來る寒三十五度前後也○尾臺  
頻に酒を勸めて砂糖粟も一壺をくれたりよりて至而少なる猪口に而臥  
時貳ツ、吞也さすれば八ツ或は七ツ時迄も熟睡也小便壹度二度也多とい  
へ共夜明後共に三度位也昨年已來淺田尾臺之藥を夥のみたれ共効至而微

也酒に不及こと遠し昨夜は太郎かとめ置たる保命酒をおはなくれたり  
同人世話いたし候而口をきりたり此酒も二ツのみたり効同し○高山權次  
郎來る講武所陸軍所と成劍術遣ひも銃炮を打ことなれりと云左もある  
へし常盤橋内之陸軍所泊と云キ

○三日 晴之方 昨夜五時頃青山法源坂を出火西南風至而烈敷大工等駈  
附る幸ひに俄に強雨に而鎮火貳三丁焼しと云贖翁雨之音は不聞烈風に而  
戸障子之けしからず響音のみ聞へ火事は承れ共其様子はみることも不能耳  
不聞足不立なかくに存命を歎息せりしかし雨故駕籠にも不被爲乗は雨  
の御かけ也○貴志の元家來別手組に而長州へ參り候者歸り來り窪田之働  
キを以命を全せりとて賞之如天神と阿のふ來りてはなし也○井上昨日來  
る寒中也幸三郎同斷也新番頭勤並に成たる人多く横山は其御沙汰なし難  
有事此人忠實に付近頃操練等上達遊撃隊之任相應せるとみえたり  
○四日 晴 歩兵共戰死之法事増上寺に而御修行大僧正導師いたし歩兵

頭香てうかう香かうするもしらぬも難有かり候由也○けふ武經開宗をみるに明崇禎六年之板也其頃大亂中六韜三略を暗記するとも間に合まし漢人之迂腐かくの如し紀効新書に事足へし太郎此節西洋兵學出精何卒實地專に高妙ならず談話に不流様修行すへし魏源など漢人に余程實用之學者也渠か著述の海國圖誌聖武記にもみるへしされ共聖武記之内武事余記に兵を論したるをみれば乍浦を英に侵されし後もいまた眼の覺メぬ躰の論多し漢土之人何故にかゝる事にや元來學問宋より來議論甚しく朱文公没後精密に過キ躰驗少く其弊追々甚敷躰驗をも議論に拘り書生か會讀等之時の論の如く口舌に人を壓する様に成て果々は當時之如く成シか何分解し兼申候今江戸風の人は朱子學といへ共其する所をみれば小學近思錄なとに申ことゝは別なることし可怪

○五日 晴此節過暖也 寒前後氷はりて三十二度と四度前後に成候こと兩三日也寒に入るは昨日今日とも朝五ツ時五十一二度也晝は六十八度の

ことも有火之見を望さするに遠山に芙蓉之外雪なしと云右故か米價何分貴し市中かてを不食はなし來る者に飯を振舞へは町人共之難有かること甚しきこと也右に准諸物價日の昇るかことし○山口駿河陸軍奉行並小笠原攝津守勤仕並數日にして公事方御勘定奉行御目付四人勤並と云こと也詳ことは不知攝津守は一寸寄合に成候故千五百俵別に皆米に頂戴なるへし○昨夜傳通院前出火森山危く助りしと云今朝人を遣したり貫一輕キ傷寒にゐいた平臥故見舞に不參其ことをも申遣したり貫一兩三日には起出へし

○寅十二月六日 晴 備前有光之刀來る明應年号之彫附まで申分なし二尺五分に太郎之陣刀に十二分也然ルに價六十五兩少しも不引と云或諸候所替に賣し也と之事石川獻藏世話也兼定よりもよろしいろくと考候處いつれにいたし候とも太郎之品也來十月迄手元に間に合置求可申候肥前物を高料に買に見合は下直之もの也○序に云陣刀は金ムク紋

所草柄ふち頭赤銅紋所之クサラシ半太刀栗形同様凡これに而よろしき也  
いかに草鹿ノ藍染か或はヌリ是はツカ也

○七日 晴風 窪田<sup>カ</sup>武徳編年五冊來る知行所<sup>カ</sup>兼約之通米來る○謹吾  
差圖役頭取に成候由之風聞あれ共一向不相分且あまり不無沙汰に付外國  
カ<sup>カ</sup>へ太郎は屢書狀差越候に如何之旨申遣ス辰五郎并市川など之聞込に  
而もよき勢に而勤居監察たらむと之取沙汰も有と之事也勿論不愼等之沙  
汰なし

○八日 曇夜雨 長田義次郎來る長<sup>カ</sup>參候而船に而戰爭いたし候由に而  
委細に申聞穩なる人死を決したるけしき無僞聞ゆる感心せり孫子に死地  
に没する時は船中に而逢風に逢たると同じく一致するよし有けにもとお  
もひ候○井上<sup>カ</sup>セ子フルをくる、飲たるに松の實に而製たるは小便大に  
通し夜半に六度行て大に困たりこれ日本西洋流之醫之人を殺すわけ也と  
了解候

○九日 晴 澤村循藏來る面會候長に而之事凡相分り候昔天草陣之時板  
倉侯之西國大名を御取廻し被成御討死被成候様子よく御考可被成候拙老  
以前開老と其ことを申述たること有キ小笠原侯は學問其外羽倉外記に似  
たり六十度余也寒中珍敷事なり

○十日 くもり微雨四十四度 新嘉坡<sup>カ</sup>之御文通日記其外所々<sup>カ</sup>之御狀  
來る例之通りくはり候積御日記之内月の御作實事也一吟百愁喜相集候○  
飛魚船中へ入候由白魚入船候は武王又は足利家等に而瑞とすされ共飛魚  
海面へ出れば大荒之由馬琴也故如何と一覽中驚入申候洋中大波之様子承  
候<sup>カ</sup>は大造なる事と驚申候英人之よくいたし候義感伏せり此人彼地に而  
も懇意可然○京都<sup>カ</sup>尾州様被 召候處御不快之由に而十二歳に被爲成候  
御人御名代として御出之由右故に可有之中間共巷説を承候<sup>カ</sup>いろく耳  
に入尤下説はかり也併不面白咄故胸中一礙を生す洋人と相反したる風聞  
也石川獻藏に承るに御役人にはなき咄也と承り安心せり國家を思ふ心な

き羣不逞之流言なるへし洋虜 君徳に伏し候由難有事也○太郎健に而船當りも無之候由大悦せり勇之内歟と暗に説ひ候異國船之義に付るも 皇國の無奢侈可賞今日本にある侈之物みな外國之惡臭うつりたる也可歎は武器而已伊勢之 御宮今に茅檐に而堯舜のいにしへと自ら符合する貴ことをは戎狄には咄てもむたなるへし○淺野中書來ル寒中而已也

○十一日 雨 朱子文集各潘叔恭書に學文根本在日用間讀書求義の其間之一事耳ト有其外日用間を以被申たる事多し太郎此節漢學はせねとも日用之間の工夫万端あるへし英人か申せし國家を難有と思ふこと露不忘日用之間事々物々に心をつくされたらば誠心誠意の學文晝夜あるへし無據書物を廢日用を以學問とする朱文公の言に合へし中村先生と對話之節に慎る先生に問ひ候る眞學文を出精有へし老拙の了簡如此如何先生に御問有へし

○寅十二月十二日 雨折々雪 將軍 宣下被爲濟と之風聞承りて大悦せ

り前に記す羣不逞の鼠輩か流言も忽に氷解○前に記す光之刀五十金に價を申遣したる所不賣五十五兩と決相求る積に約せり商賣直段を五兩高しされ共太郎一生百年も身を守る刀上直とは不被申麥粥之老人はつむに而其よきこと御察し近頃に而之刀也

○十三日 晴之方 昨日少雪みえたりと云來年をおもひて高キ所を望ませみるに四山みな白しといふ今一度里方までも雪有たし○知行所村々年貢納方不審故に書物を尋るに留みえす書藏之内か出たり上吉田村金納之義不行届成義有之様子に付三折を明年始には可罷出旨書狀出ス○軍艦多く御あつらへに相成其内十二艘此節参りたりと之風聞大造なる御所置感服せり十二艘に而は五十万兩以上にも可相成か○原彌十郎を玉子くれ候而太郎之無事尋として來る返事遣ス

○十四日 晴之方 元吉來る過日之備前刀を井上讓くれと之事也刀は意に應したるを得る事甚堅し不慮に得たるにて望にまかせ五兩高く求たり

太郎金子を預置る爲買たるによりて譲りかたしと申遣し候長短手に應し  
燒及其外心に應したるを求ることはまれに有もの也故に不讓且自ラ責て  
云物を玩は志を失と眞に然り三年後ならては太郎之手に不入是を以今知  
行所之貧人を惠へきことなるに前後せり平日之修行に背けり若井上強  
申サは遣し知行所之方へ可廻され共此とき刀又得ることかたし○長  
州へ參る長谷川某五年懸に評定所に御吟味成主人は牧野備前守へ御  
預ケ家來は揚り屋入に成候由士に被捕候もの鎮西八郎惡源太五郎時致其  
外三河豪傑之士にも多し只節ヲ敵に恥し候哉臆し候哉之二ツのみ繩かけ  
られたるは恥にはあらぬや逃たるものは敵と手相せし計にもよし  
○十五日 くもり 將軍 宣下去ル五日京地におゐて被爲濟候に付今日  
十五日惣出仕のしめ麻上下之由○今卯刻阿花平産女子出生至る母子共に  
健也まこと安心せり女子故先ッ御届等は太郎承知之上と差扣置申候○八  
幡ノ明六時女來りて梅を起虫氣附か少々腹いたむ様子之由也先ッ取あけ

はは呼にやる方と申し間もなく急候取上を可呼と聲聞え其聲と一同に  
梅かけ行様子はや出産に産聲聞ゆ取上はは後産に漸間に合六ッ半時  
には歸りたるよし也やす梅之老練も驚たるけしきうまるゝ時は白くして  
鼠兒程之物故驚てみ居ル内に忽赤くなり並々之赤子と被爲成不思議なる  
事也と也天工之妙理之可量にあらす無程うめだき來る眼鼻の躰よきみと  
り子也太郎歸り之頃は駈步行よくものいふへし○成瀬對馬守を寒中見舞  
として玉子三十はかり之箱來る太郎方は申遣しいつれ同人を御禮可申上  
と使者に及挨拶對馬守兒は太郎御同行之由お花を承候○此節之落首を供  
部やに話をきゝたりとて話に

細袴筒袖羽織よけれ共長と素袍はいかゝなさるゝ

此歌ト之字置處あしき故おかしなる響有かことし熊次郎泊番明に寒中に  
來りての話也○高山隼之助來る來六月迄天保山地之警固也といふ也此節  
御扶持方代百文判に渡る然ルに兵庫なと西國邊よりか百文判之似錢多



くわたる故百文判下直にゐこまるとの話也

○寅十二月十六日 くもり 尾臺と昨日護園および堀川學之論におよひ候處數部之書能々使にゐかしくれたり

○十七日 晴 歩兵頭並之廉に御用部や其外之暮之目錄申來る英在留中は不出とも可也かとみるに貴志も出し有よつて差出積也十兩はかりなり意外也○此節又々一段諸色高値に成壹兩之薪割賃貳分也其外酢五十文といふに至る昔は十文前後と覺たりこれにゐは暮シ去年に倍すへし驚入也○昨夜小兒冷てもしや弱手かと心配して夜中に其旨申出たりけふはさしてともみえす乳を附梅みるによく吞と云安心せり祐玄は疑らくは月未滿にゐ生しかと申すよし也日々呼寄みるに血色宜敷よき兒也なるはと小サクみゆる也○宗伯明番可參旨にゐ未來○貴志之養染二重産婦へ別段來る新家を小重并フタモノにて養染來る高山をモチ菓子一重堅ふし五本來る

○十八日 晴 昨日淺田宗伯來りて出生をみて月たらずにゐらす骨細なる也一躰實し居れりされ共胸に胎毒有赤過候由にゐ手當之藥をくれ且通方不十分とて紫圓一日三粒ツ、爲給候積にしたりしかるに昨夜も大小便共に通し不宜紫圓も追々に十粒はかりのませ大黃入之まくりも爲吞たれ共今日に至りゐは小便も不通尤祐源は始を頭を傾候由今日承る撮口ホウキシの難症を發するかと甚不心針醫をも呼にやりたり昨日御扶持方替り之御金百文判にゐ出候由にゐ云々之説を承驚きたるに小兒之不出來にゐ昨夜寐かね彼是候ゐ今日は不出來也されとも既此日記をも晝故目かねなしに記す位故少々之事也自分には不分候

○十九日 微雪 新十郎事山本臍也七十六迄勤理窟を申通シ布衣被仰付中氣發病逆に隠居薙髮感心していはひ遣したるにけふいろくくれ甚以いたみ入たり一度も貶迂のことなし易習坎心亨と有は險阻艱難を重ね重ねて人の修行之出來ること也臍也若時江戸へ出し何度之艱難を重ねし

や中々老拙の所及にあらず故に十二分ニ隱居とは成し也天幸勿論とは乍申其人の慎其外にもよる也太郎此度ニ御用路の艱險且單身獨歩して異人と交る實に習坎也かゝる修行一生ニ德也これは洋學の外なり○出生いかにしても通しなし湯藥を吞すれば鼻ハ出る也され共今日まで別に病は不發只々傍觀薄氷を踏かことし今日は紫圓五粒を用ひ外の藥はやめよと宗伯ハ申來る歎息々々

○廿日 雨 昨日平澤ニ説ニハ小兒元來健也出生俄に付手廻不宜其内冷たる也紫圓も可宜愚考ニハ裸にいたし肌にて暖さて藥も乳を多く可吞小兒家にかけてよと云河内善庵といふ三町目谷に居る醫をすゝめたり昨日申遣したるに今朝來る出產廿日はかり早し通しなれば撮口に成と云藥は半夏に芒消を加へたる藥をくれたり八時頃通し附安婆々か懐へ三ヶ所糞を仕かけたりとて悦て見せたりこれニハ今日中二三度も通したし乳は吞と云也

出生萬喜名附生喜 太郎誕生太郎誕生 七夜七夜 少々少々 昨日昨日 大便大便 通シ通シ 見右見右 直直 給候給候 乳汁乳汁 祝祝 酒酒 看看 遺遺

○廿一日 風雨 生小兒の七夜なり淺野ちりめん模様小袖一表并看八木ハ縫有巾着新家ハ看并巾着代百疋夜ときの者へ菓子一重來る○原彌十郎炮兵頭被仰付候旨昨日吹聽來る横山紀伊守勤仕並寄合内藤幸三郎勤仕並小普請井上藤左衛門和學頭出役如元ニハ御番御免ニ由幸三郎參候ニ咄也其外勤仕並ニ面々多出來候由也御目付は先日十人勤仕並被仰付候とニ咄也

○寅十二月廿二日 くもり 小兒不快安婆々みわ婆々肌アサキに附暖る事鶏の玉子をかへすかことし右故かあたゝまり通しも大便は少々宜小便は並に通し乳をよく吞と云是ニハ先ツ宜今日も呼よせみるによほとよき兒也何卒育つ様にいたし度七夜内に子細有もの十五六歳迄可心附といへり我死後も手拔なき様に可致○箕作貞一郎來る從弟共太郎ニ世話に成候禮也且同人も來春は西洋に參候様子也と云面會いたし度由なれと厠に臨み居たれは斷候西洋はいつく也や夫は不承候

○廿三日 晴 出生大にこゝろよし大便もよく通するなり○去ル十七日  
上野出火彌以 御宮御別條無之併護摩之火出火御別當并其外にも怪我  
人有とて紛々之説有○内廷へ御儉約之義申上しに役人に万俵以上取者有  
それは皆米之由いかゝと御尋有て六ヶ敷候由或人之中間供部屋に聞た  
るとの説有例之悪言なるへし公子など今に皆米に被下るゝ故にかく申  
か公子など博學にして有名之御人なれはいかゝなる筋はあるましき也  
○廿四日 晴 もち春也例之通也然ルに兩三日以前を下町かけて尋ぬれ  
共粟をうるものなし麴町に黍をうる家有を見出買たり壹升四百五十文也  
當暮市中もちをつく人少しチンもち引すりなどの人を往來にてみずとい  
ふ也もち米も下直之由○小兒通し先ツよし此分には凌へし身暖に成泣  
聲なと高く成レリ  
○廿五日 曇夕雨 小兒少々宛よし○良右衛門出生へ守り袋并かれい  
五ツくれ候○御廣敷のもの御ヨヒ上ケ之由 東照宮大坂其外被召連たり

しらぬ人めつらしくおもふとみえたり實事は不知ものいひさかなき下人  
共可憎

○廿六日 晴五十六度 此節は定而ロントン府へ御着なるへし御日記に  
あつらゝおもふに赤道下は五十才以上にあは越ること不能され共十月  
出立にあ十一月に赤道へかゝりたらはよからむと國々のミンストル共か  
いひし實也けり暑にいたむ勿論と申候内浪荒きにて誰も驚も怖もし其上  
に腹もむる故胃腸に差障るなるへし森田岡太郎かカク症に死し菊池伊  
豫か一旦大煩いたし新見豊前か耳不聞なりしも夫よりかと疑ふ也ロン  
トンには良醫もあるへく航海之巧者も多かるへしよく聞て無病に候とも  
手當有へし○去ル十七日上野出火護摩の火々に御別當はあまりに驚て  
死し俗に云膽潰れし類なるへし其外 御宮は更に御別條なしと云かとり  
ゝの話の内偽なき様に聞ゆるなり 將軍宣下御祈禱中也なとゝも申  
也

○廿七日 晴風 昨夜品川宿出火よほと焼たると之事也○上野 御宮御別當寒松院はをのれ御別當之時に當り出火させ無申譯とて火之内へ飛込まむとせしをたき留られて其時強く腰を打死せしよし風聞する也武士ならば山本勘介か平備を見損し討死して申譯せしと同じ家に對し職に對し寒松院か志を以志とせは賄賂にふけり又は職を等閑にすることは有まし上野 御宮へ 上之御參詣絶あなし 慎徳院様一度御參詣有し也其節我見廻として參たり寛永の頃の御造營にキリシタンを好みてロヲマへ被流家潰れたる大名獻備之由大石燈籠御構外に今猶存せり目を驚したる大造なるもの也以前野服に 御宮見廻りとして參候御役人有しを御別當怒て 御宮へ奉對不敬也とて咎めたる由此度之寒松院か才子の規矩を破る人にかゝる過は出来る也不敬とかめされては其職により差扣等勿論可心附事也

○寅十二月廿八日 晴 尾張源同殿へ一橋屋形被進昨日御移之由當尾張

殿は追而西丸被進候由之風聞有○後藤錠太郎高橋清之丞御廣敷御用人被仰付候由也○錠太郎御勘定出清之丞謀方手代出に而兩人共切磋之修行有し人々也

○廿九日 晴 日下は一之脇差出來差越實に上工とはなれり目を驚し申候人修行に寄古人に不劣こと如此五六年前に申付置たりしか暮に成來る是も驚之一端也十二兩貳分と申こと也備前傳直胤父子に勝るとも減不申候

○晦日 晴 昨夜殊に大風小石川白山邊に火加賀近藤登之助を殘し聖堂手前に而焼止る貳町目之町屋敷焼ル地借之もの共は貳百疋白米貳升ツ、家主へ三百疋三升遣ス井戸鳥居上かり此方早々作り遣候積地代四ケ月分ゆるし遣ス余ほと之火事見舞也千段木之方は別條なし壹岐殿坂はかた頬少々焼候由也○例年藤左衛門か信濃守參ル筈なれと信濃守之文通に而昨日斷來る○市川弁吉組に而は組頭はしめ勤仕並十人と承る弁吉は小

筒組へ割入になりせかれは見習御免也新家鍔作も出役如元にも御番御免也

慶應三卯正月元日 快晴風なし 昨年は太郎御役并御用懸女子出生都而可賀事而已也され共太郎は留守よめ平生躰なれ共未出拙老如舊全者奥方壹人小兒相手に寂然として夜食を喫する而已也き今朝の雜煮も同じされ共拙老の外はみな健也万喜兒をやす婆だきみする人形のことし眼を開き四方をみるけしき見ゆるかと察せらるゝ撮口風等はけしきもなく通し宜よく乳をのみ申候いかにも微少なるもの也追々生育すへき躰也○兩三日已來寒し三十五六七位也四山の山雪多し

○二日 曇 年賀之客朝より夕かた迄對話しかし一向に不覺勞よほと本復せしとみえたり○井上信州來る御役向は御取用よき様なれ共昨年藤左衛門鐘三郎之御番御免はきゝたるかとみゆ太郎序之節夫となくなくさめ

の文通あるへき方か歟○森山多吉郎來る同人が航海并英へ參候而之凡承る同人も早春上京之御用にも可有けしき也フラン、英等之ミンストル大坂へ被 召御目見有之候由○郷原左衛門尉病氣に付舊年御役御免之由これには有爲ての事とおもひたるに胸痛は事實之由也

○三日 快晴 舊年は表坊主二百人銃隊組被仰付例之坊主衆故所謂破レカフレけしからぬ騒之由御目付之箱を厠へ持行捨置たるなと申也御使番高卑之面々計五十人勤仕並被 仰付候由太郎英にも三年勤學之御用難有也公儀御爲而已をおもひ候而老父妻子等之事毫おもふへからす三兵局之人々酒機嫌之人多しと申也太郎江戸にも歸り遅キ事なと有は老拙航海よりも心配すへきに此節其事絶而なし○多吉郎英人等至而深切にも決而心配なきよしを吳々申候

○寅正月四日 快晴 本郷之屋敷再建六ヶ敷町入用年々五拾兩はかり之もち出なるへし勘弁物也○淺田宗伯倅舊臘不法ものに出逢耳を腮へかけ

被切候由之風聞有同人弟子來らは可承人の怒り受る人に決あなし○酒店に冢は不及申牛鍋と云かむはん多しと云在にゐは猫を賣ヲシヤマス鍋と云看板をかくるに至ると以上良おもふに躍り子を抱置隠語かもしるへからす或人云二百といふ隠語なりと其詳なることは不知

○五日 くもり 禁裏 崩御之由に松かさり取拂由昨夕承り驚候所々聞合たり其上に今朝も貫一を差出みせたるに無相違由に付いつ方々も達は無之候得共取拂御痘瘡に大晦日 かくれさせ給へりと云人有推古帝にや同し御病にゐかくれさせ給ひしか折柄守屋佛像を燒毀時にゐ其祟之由に日本書紀にみえしかと覺たり暗記必誤あるへし○昨夜セイ蘭御差出候十一月廿三日附之御書狀并御日記且中村先生之御宅狀共相届く例之通うちより一覽也祭之節之けしき其序にあるかことし笑もし歎キもせし也一蝶齋に藝を仕損させましと胸をひやくせしよし異國本朝の人よりて藝つくしいひ立は互に唐人のねことたるも一奇也○阿花まく

ら直しに今日逢申候如常少もかはり不申候小兒も亦よろし一同に隠宅に晝飯祝ひ屠そなと給申候○晝過に廻狀來る廿九日之 崩御に鳴物停止普請共日數なし

○六日 くもり 此正月太かくら女大夫其外削りかけ賣など大に困窮すへし○箕作貞一郎急に外國に參る明後日までに太郎之届物差越候様申之是徳川民部大輔殿に一旦會津へ御養子之積被爲成候處御沙汰止に清水御屋形被進候則御三卿之御一人也御附添としてフランス其外西洋各國に參候由也御附添は向山榮五郎田邊太一郎其外之由五六人之名前承る巨細は太郎無間も御目通いたし御機嫌も可伺皆々にも面會可致候間其節實事を可知遠國へ友來る逢候喜わかれ候歎き相半ス李陵か情其時御察有へし

○七日 晴くもり昨夕々徹夜の雨也 火事の患を忘れ快寝いたし申候○田邊と箕作へ届物雪踏浴衣之類わかち候あたのみ遣し候○家來二人共宜

貫一は日ごとに出ていろくいふ也泰助よく其職をつとむ序に一筆之書加有へし○本郷之借共に地代ゆるし遣右に付町入用は此方を償出入之差に有よほと之事也○御觸に有見れば千石の軍役昨年を増候も五十五兩と成左も有へし○中村へ宅狀一昨日遣ス受取書來る

○八日 くもり 小兒ますくよし今思は宗伯祐玄等か説を針醫小兒家の藥尤也○月潮共に四分ツ、日々差有三十日に有は百貳十分之差有わけ也しかるに潮には朔日二日廿八日などは十分ツ、違ふ也月にも差あれとみえぬにやいか

○九日 快晴 小兒先ツ常に不異眼を動し左右を見樂はいやかりて不吞よほと智惠附しとみえし也○此節強盜はやり候由菊名仙之丞方は拔刃に有内へ入候もの四五人外に待居候もの四五人奥方を峯打に有打倒し案内させ百五十兩奪取候由也四半頃に有隣家都筑に有は夜宴中之由風聞右故こし拔も毎夜ヒストン一挺を手元に置七ツに成と先よしと熟睡

○九日 くもり 此ほと聞に舊年は強盜三十人四十人に有先ツ自身番へ上り番人を押そこに有手分いたし質屋等之富家へ參候も金子品切等盜取候由よき刀劍を撰候も携行候由

○正月十一日 くもり 陸象山語錄隨身規矩後生切要と有象山朱子在世中相反したる教故磊々落落にして其子弟或は放蕩なるも有かとおもひ居たるに如此語に有は平生謹嚴なることか宜哉朱子の金谿講義の跋に記せられたるかことく尊信ありしこととおもひ當候○今日退密中に付具足の祝ひなし依舊しるこもち而已給申候御軍製改り今の世上之躰に有はダンフクロの類に有もかさりかならむか

○十二日 晴 小兒少々笑ふ也可愛兒なり眼太郎に似且いろ白く髪黒くして濃し○或ル若キ人タンフクロにて沓をはき音羽の橋にて士と行違ひたるに此にもマタルスメカ居るかとて刀を抜かけられ驚て走り避たるに沓はけしからすありきにくき物之由此節同しことに有被追たるもの所々

に有よし尤奇を好み競て異國風をいろくなし刀をもみえぬ様に帶する者など有甚敷怒れる狂狷の士の仕わざなるへしと之説也

○十三日 曇之方 市川弁吉來り刀拭くれ候○はなしの序にいまた足不立これも天刑病かといひしに傍におおさと云苦學を多なし御否隱居に成再被 召出御願之上御隱居におもどり被成たれとも無病ならば維新の世上必何か可被成其時よければよし左なければ又々御咎か自盡のこと有まじきにあらすおさとを以おもへは天幸病なるへしとわれ微笑して黙止しき

○十四日 昨夜今朝へかけ雪 菜一苞百五十文也雜煮も容易に不食酒壹合貳百文也禁酒並多く出來たると之事也○津田仙彌へイキリスの使たのむ積之處諸品切解相改候由に付止にいたし申候

○十五日 晴風 小兒を抱たしされと例之手に不成よめに爲抱置みるに笑ふ也

○十六日 晴之方 淺田宗伯來る菊園相公台用と銘有筆之内第一番之大

筆遣ス殊之外之喜ひ酒に過たり是は吳壽榮之よき筆を價を不論求め共今は世に希也とて嗟嘆する故に遣したり此節殊之外高直之由太郎歸りによき中字かきの筆を求め來らばよきみやけなるへし墨また同しされ共墨は和製にても先ッ可也筆は漢造ならては絶不參候試に英などに極品之羊毛を求め和製せはいかゝ○宮御方御なけきに御病はなけれ共御寢食共に不例官醫朝夕の伺にて官醫殊に御用多之けしき也

○十七日 雪 稻葉兵部殿御老中格に海軍惣督松平縫殿御老中格に而陸軍惣督に被爲成候由也○横山庄三郎來る同人四ッ谷鳴子新梅屋敷賣物に出候を買候る辰五郎同所之地守に相成候由百姓持之頃は人々參候而遊山所になりし所也勿論梅其外木多キ由

○十八日 一昨日今朝へかけ雪雪は止たれ共風吹くさむし 所々押込沙汰勤士並之話御廢に相成候當日坊主共酒二本部や持込たるよし等つまらぬ咄のみ也泰助貫一申合之を嚴重にいたし銃炮は直に用に立様改置



日くれを門をへ兩人共よく心附候中間共へは銘々鳶口渡し置井上へ聞に遣したるにいまた得者無之様子也

○十九日 晴

世の中は心細くや細袴涙をつゝむ袖さへになし

王様もとをかとをく都詰歩はかり有て金銀はなし

此節銃隊に成候坊主共不法殊に甚しく常すらにいろくの落首を云出すと之説あるもの共渠者か仕業かも知へからす上之御恩しらすかいろいろのこといふは可憎々々

○廿日 晴 御即位の惣出仕恐悦之御事也 御寶算はいまた不知御十四

とも御十六とも申上ル也いつれ御幼年とは奉恐察也

○卯正月廿日 晴 去ル十二日夜御廢に相成候坊主共相集小栗豊後守へ及狼藉當人は手負奥方は即死と申風聞頻也豊後守風邪にち淺田宗伯藥をもらひ近日出勤之由此節之風聞みな此類也

世中は心細しや細袴涙をつゝむ袖さへもなし

手はとをるとうく都つめ歩はかり有て金銀はなし

と云落首有よしこれら或は坊主の類を申出せしや

○廿一日 此節風邪也

世の中に捨られ果し老か身も尙訪ふものは風の神のみ

兩三日鶯なく涼闇のことに感有て

絲竹のしらへも絶しことししも鶯のみや春をしるらむ

米壹合壹勺に成大工其外に質に置者もなくなりしもの有たと申也

○廿二日 くもり 昨日之廻狀陸軍奉行並石川若サ守陸軍奉行若年寄兼同織田宮内大輔海軍奉行並陸軍奉行並駒井甲斐守陸軍奉行並御軍艦奉行藤澤志摩守歩兵奉行被仰付之○北條松太郎歩兵差圖役並勤方被仰付二十人フチ被下之小栗豊州今日を登 城之旨井上を書狀之追啓に相見候○井上へ問合たるに歩兵并御軍役金當年納分五十兩昨年分貳兩余也これは御

書付面難解によりて也

○廿三日 晴 土屋大膳亮來る英へ壹封差置參る小栗之事いろく評  
判するよし也歎敷事也爲君集怨其身とは小栗庶幾天下之士といふへし  
○廿四日 晴 本所回向院の浪人共加り多人數相集候由先達の中か之咄  
に而今に其儘之けしき也 御留守中御役人はいかゝ歎息此上なし○御能  
役者共不殘御暇に相成候由此節浮説等多かるは坊主其外能役者輩を起る  
事かもしらす不容易候○石墨は一來る當年四十八歳也と云けにも御先代  
之御差被仰付候筈也直胤かは一は鍛冶になるへしと申せしは二十歳前の  
こと也鍛冶の事を問に心得に可成こと多し相州傳六ヶ敷是に而は鍛損た  
りとおもふ所に妙所有これ六ヶ敷譯也といひき心得有て腹に得たること  
有咄なり太郎が五ツ六ツも年下之時既に右之通直たねはいひき太郎など  
片時も不怠は一に不恥様すへし  
○廿五日 くもり之方 昨日大根立うりに而半分五十文に而求たり黒こ

ま壹合百文也貫一髪を爲結たるに七十貳文湯錢三拾貳文二階へ上れば廿  
四文かゝると申也夫に而しるこや其外食物みせ殊之外繁昌之由也榮太  
郎方に而商賣晝前限に而例之羊羹は不及申都而賣切良右衛門云榮太郎み  
せに而かひ來る人いつれも儀強の男に而意氣揚々鬼の首にても取たるか  
ことし絶倒也と○廿一日の風邪全之鼻風也然ルに夜饅頭を一ツ喫たるに  
當り夜半大に困しむこれは開闢院様のことかとおもひしに背をもみて漸  
によし其悶中如夢太郎持病など不起にしたし異境異人の厄介にならはい  
かならむと夫而已くり返し胸に浮たり常に左程に案したることはなし不  
快に而精神亂れたるとみえたり今日は大に快ひけなとすりたり此情此こ  
とに逢たるものならては實にすること難し人情とは乍申至而愚なること  
也○淺野年始心に而來る咄に近親小出某西洋留學生被仰付當人難澁は不  
申喜而御受之積之處當年十四歳に而且當主也母殊之心配に而六ヶ敷申に  
付太郎を例に而異見を申居候由

○廿六日 雨 三ヶ村役人共罷出る年始之禮は無之酒食等遣し候義例之通なり極貧人三人に壹人に付壹兩ツ、地頭所を差出無高難澁もの壹人に付日々麥壹合ツ、百五十日之間惠遣す此金九拾兩余是は非常貸附金之内に相渡ス役人共預り金之内故難澁するかとおもひしに難有かりし様子也

○卯正月廿七日 晴之方 原田市三郎來る新吉を同道に歸る○箱森古橋兩村之もの共へ之賑恤二月朔日々六月晦日迄日ごとに麥壹合ツ、遣候積十日毎に一升ツ、相渡候積引わり百文に付壹合に付金九拾四兩ヨに成兼る非常手當金はに手拂に付跡可渡遣候は手薄之處金子無之候に付右は十月之御切米之節五拾兩相渡元金に爲致候積外に極貧之病者三人に金壹兩ツ、物成之内遣ス上吉田村之方非常手當金は其ま、利倍貸附に致し置これは富村なればいか様にも村内に惠み方出來候わけなれば也吉田村には同村へ立のき候節入用として金六拾兩相渡年々十兩ツ、返納之

積之處年延相願候に付不及沙汰旨申渡當年分拾兩は同村貧人に類焼いたし候ものへ貸遣ス野州兩村之貧人と申は必乞食之如くなるものなるへしと涙こほれ申候

○廿八日 朝微雨午後晴 武家に抱屋敷町屋敷等所持之ものは此節からに付御取上に相成候由之風聞御尤なること也有余之御家來之品に御急務を御取計誰かは御尤と可不存かゝる所大觀せされは心之上に間違起る也○支那米は石灰にせしらけたる物に付毒也と云説を専ラ云也米屋なるとに被欺るなるへし先年つき米屋共石灰を以早くしらくる術をいたす故ぬかに毒有て馬死スといふ説有われ大坂町奉行之節試に石灰ともみとませたるものに與力番所に鶏を爲飼たるに少も子細なし浮説止たり其頃牛馬之俄病ひ多く本多加賀方に一ヶ月に乘馬二ツ斃たりき今おもへはコロリの類なるへし石灰無毒は西洋船に水船のそこに石灰を入るゝ也其ことに腫疾なしと云也鼻の先キ之横濱のこともしらす妄説を

云々可成なる人物の欺るゝとはあまり之事也支那米は白米兩に壹斗四升とか申也

○廿九日 晴 今日名主共晝後歸村也さてくゝいろゝの事を申夫々申渡候野州兩村へ備金元として兼申聞置候通五拾兩下ケ可遣旨申聞候處得と勘弁之上可申立旨申之追否申立候積下吉田村々無利足に金六拾兩下ケ有之右之内拾兩今般相納候を類焼拜借十ケ年無利足に貨渡殘五拾兩は隱居之なくさみにいたし候も不心に付非常手當金之内くみ込村方の貨渡し候これは先年新吉郎彼村に立退候積之節爲手當相渡置候金子也百五拾兩にもならは元へ加金いたし候は相止年に十五兩宛利金取立村方の貨遣し候歟或は實用之手當にいたし可然みそ用人頭取不快中よほと之辛苦也され共世話丈は効有故捨兼申候

○二月朔日 晴 米少々下落之由御張紙八十兩四分一朱之由○甲州道中

某宿に鬼女有之墓所をあはき人を食右を見とかめ候母并夫をも食殺人之小兒を取食ふよし新宿邊迄参りたるとの浮説婦女子共恐候由平澤咄也○二日 晴 西南風強し○謹吾今日着之由昨日申來る俄の事也尤凡二日頃なるへきか之由は兼虎之申越有しかいかと存居候故俄の様に存候太郎英へ參候不隨翁之宜方を又半身被奪たるよりも甚しかりしか今日之着に十分ケ一はかり蘇生之如し三ケ年相立太郎成業の後歸候節存命に不隨翁面會を得は其節はいかにや有らむと今先おもひぬ謹吾方へは過密中物靜に可致迄且養父母之方の參機嫌を早ク可伺其禮不畢しては面會不致旨申遣ス七十の病叟三年の別其實地ならては難分○三日 晴 昨夜右之通使者にて申遣たるに夜四ツ前に相成未歸伏りもいたし兼咄いたし居候内俄に謹吾參る女共騒キ居候内相通る例之鳥裝也謹吾犬高頬骨あれ鼻高く眞之英人に似たりこしにヒストンを下ケいかめしき姿也わか老僧病中之躰に驚互に落涙之外なし京地にサツヘル隊を

取立辛苦之様子臨別歩兵共泣哀候も遠く送り候由サツヘル隊之歩兵は別後は食物無之由等一朝一夕之話に難及嗟嘆のみにて相歸太郎之跡を追ひ英に参り留學いたし度志願に頻にうらやみ申候

○三日 くもり 土岐虎之介昨夜歸候由に來る同人此節は調役に相成候間居間にあわさと酒食差出候處頻に迷惑申述候ひき謹吾よほとよき勢に相勤平岡某よく謹吾を駕御抑揚其節を得たるよし平岡氏太郎を賞しうはさ有之由等承京都之風聞江戸とは違ひ少々安心せり金吾虎之介へ太郎之咄難盡日記其儘貸遣し候○久保田が武徳編年來る先便前後せし也是に先ッ全部なるへし未改窪田大坂迄參候由也

○四日 くもり 眞喜女今日市ヶ谷八幡へ參詣月代をも剃白無垢裾模様を爲着候處大キク相成候此節の躰には子細もなく成長すへし智惠附キ藥をいやかりよく笑ひ申候折節到來之由謹吾も又虎之介も立派なる鯛其外肴くれ候下々迄爲給にきやかに祝申候され共過密中に付其心得は

堅く申付候虎之介話中に謹吾事に付心配氣之事なし

○五日 くもり 學問所の幼年之もの差出候様之觸書來る○長州御進發之義 國喪に付御差延之觸來る

○六日 くもり 十二月十二日埃及より御差出之宅狀并日記寫眞圖中村之一封井上信濃守が届來る是は御老中方英人と御應接之事市尹加り不申候もは不相成事有之罷出居候處英人持參に付井上へ御渡有之別條無之哉否之義御老中が御尋に余人にあらすよりて開封して平安之次第申上候由之副書いたし來る海上を日割通に參候とは奇也此躰を以推ときははや英に着四十日に及へし日記を一同へよみ聞せ候圖有故やす婆々迄によく相分ル日本歴史之事異人の御答方之義古史官有たれ共兵亂に中絶し其後は連續せるものなし古事記は未定之書之如きものにも蘇我馬子か殺逆のこと佛法之事始候をも不記日本書記宜し續紀後紀は殘闕せるものか可疑難讀もの多しよりて物語物等によりてみる外なし日本のこと二百年來

出来しもの大日本史よろしされ共大部也皇朝史略よろしかるへし松苗か  
國史略は源三位か鶴のことなど記し豊太閣は 後小松院之御落胤など可  
怪見解なく有爲の書也外史政記にて凡事足可申歟彼等所持之上は隠し候  
事難成大意右之御答にて可然か

○七日 晴 昨日夕方謹吾来るいろく話いたす同人くせに話に詩學  
有話は六七分なるへし武事に大損也○又吉郎謹吾をみてニヒくといひ  
て喜ひ附纏ふ也太郎と見損歸候かと喜ふかと被察アツチニヒくと云也  
○万喜兒をみるにいかにも穩和にてよく睡る也躰に煩ひ氣なしとみえた  
り○謹吾航海の志有戸田に不承知なるへし頻に太郎を羨む歸りを待て  
志願を遂度と云也

○八日 晴風 福澤諭吉か著述西洋事情と云書をみるよく出来たり英墨  
二國之政事等粗相分ル譯書中方今第一なるへしワシントンか定めし仕置  
筋簡にして至る輕し漢土に彼かことき人を見す珍敷大人也

○九日 晴 詠史 墨夷華盛頓

三代遺風今奈何 只看赤縣酷還苛 巍々盛頓寬宏度 明祖漢高慙德多  
赤縣の字如何漢土のこと也聞へ可申や謀反叛逆に亦も罪其身にとまり  
闕所之事なし實に寛仁也

○十日 晴 昨日貴志大隅守来るいろく承候亦風聞の京師は殊なるを  
喜ふ又吉郎大隅守をみて大に喜ひアツチニヒくといひて手をひき来る  
太郎と同人裝束故間違しなるへし

○卯二月十一日 晴 市三郎来る長吉之短刀研たのみ遣ス此短刀人々目  
に附井上などに亦も望有之けしき面倒に付拵を改一乗の三所を附る一乗  
の三所藤春野の三十五兩以上之由長吉三四十兩に亦も難得と云太郎心得  
之ため記ス太郎終身愛玩すへし

○十二日 晴 薛文正讀書錄に披髮而祭於伊川與辛有之歎非知幾之君子  
孰能與於斯と有然ルに此節惣髮之人に前髪を常に少々ツ、切候亦ザンキ

アツチハ  
在彼地ノ  
意ニヒハ兄  
此也譯シテ如

リのことくになるを好み甚しきは夫へ焼小手を當ると云かく風俗を亂り候ことは西洋學には決り有まし元來今の野良と唱候ものは日本の風俗貴人にはなし乍恐 神君の御像其外みな惣髮なり後三年の圖八幡太郎其外みな惣髮也しかるに奥州人の首をきりかけたるに限り野良の如しされは下賤の者か或は蝦夷の風貴人にうつりしもしるへからす

○十三日 晴 太郎學問するに西洋之善なる者をよく選ヒ學ふへし感溺すへからす英人より太郎へ之忠告に日本は父母之國也片時も忘るへからすと云少にも廉立たる時は日本の衣服を着せ他國の有益の書は翻譯して國人に教るなど西洋人之取計感心也

○十四日 晴 歩兵奉行平岡越中守大坂町奉行被仰付候處病氣に付願之通御役 御免溝口伊勢守陸軍奉行の公事方御勘定奉行被仰付之これは二口共よほと已前之事也兩人共格別御用立下之申ことをよく聞人のよしに而虎之介など慈母にわかれたるかことくいふ也○久保田大坂に參其跡へ

吟味役御目付西國に參候由御目付は榎本久太郎之由久保田之御用は何か不承候○太郎之日記を謹吾方の虎之介を以遣し候處太郎懇意之由大砲奉行とか成瀬某一夜日記を借用之義虎へ申たるよしに付貸候も不苦旨及挨拶何も日記中禁諱なければ也○根津肇少々病氣之處相果候旨爲知來る十日計前に來りしかはかなきもの也○吉田村には四月五月之頃金入用を貧人は衣類を質に置又は高利之金をかるよし當正月新八郎話也暮入用を手許に置には四五月頃は瓦石の如し右を四月五月貸遣し尤利足冥加等決りなし十一月晦日迄に追々に返却すればよろしこまらば可貸遣村役人共一同得と相談之上可申出旨申遣し候

○十五日 晴 戸田いまた野田へ不參様子に付尋に遣す太郎以前上京中交通および屢金聊なるへけれ共金子封し入有之候旨をも申先達を諭置たる跡に付申遣たる也謹吾は大坂に而月々全之御手當金貳拾六七兩之由委細虎之介はなし也

○十六日 晴 金吾方々返書來るいまた參不申候由一教諭可及○長吉の短刀研に遣ス是は人にねたられ不申候様立派なる拵にいたし置候積藤一乘之三所にあさくら明珍之かな物附候積當時賣買合百七拾兩内外也我等不居とも士分愛玩すへしよき短刀となるへし人に譲へからす

○十七日 晴 澤村脩藏來る天草并日田陣屋附少々宛外にも細川之御預所に相成候場所所有之候由承る 公儀之御所置感服せり日田御代官所之強みと成へし○山田半嘉來る印籠類殊にひ事也と云銅に短きキセルを作り其上を蒔繪にいたしたらは一本三分貳朱位ならば立派之品出來月々之狀之内封し入遣し候事出來可申候

○十八日 雨 宗伯來りたる時兒女をみせたるに大に宜と云よく笑ふ也眼清朗にして鼻高く耳よし可惜男兒たらさること日々小兒家の藥一ふく宛用ふ病氣快成一度も手もどりなし

○卯二月十九日 晴風 金吾妻に小普請會田勝三郎娘貰受候積之旨左近

か使者若園要人を以申來る尤此節引取候は如何に候得共三月には衣類之都合も有之其上若謹吾京都等へ御用有之候は差支候間極々之手輕にいたし内々は廿四五日後に爲引移候由不十分候得共太郎と謹吾とは味ひ有之一日も早く引取度と日々申居候事に付存寄無之旨及挨拶候勿論此節何之事も謹吾事に付及承候急々と申候譯には無之三ヶ年勤番いたし居無事謹慎に歸候故若キ者故案事候は怙息の情を老拙之起せし也正論には此節柄如何あるへき

○廿日 晴 昨日謹吾を呼詩學のこと及異見修辭立其誠と申こと忘るへからすと申聞遣し候○平澤云服よほと宜下人ならば這廻り自用を足へし運動をせよとの事也依る坐敷内いさり歩行繩床へ上らむとするに未能少々之事也下り候は出來候太郎出立之ころに見合候は少々宜効如此  
○廿一日 晴之方 原彌十郎御目付被仰付之一ヶ年勤番之被仰渡有之候旨奉札來る○此節乞食多く行倒も有よし也鳴物等を以行といたし候もの



はいかにして暮候哉○或人藤村へ菓子を誂居候内上へ一ならひ菓子を入下は貳分金をつめたるを見しとの話を傳聞に聞しと云これ風聞之誤也當時 明君上に被爲在候得は何人かかゝる物を受用すへしおもふに玉子いろの菓子の奇品を見違たるものなるへし

○廿二日 雨 樂水院様十三回御忌に付新家并御孫之面々等へ配り物いたす○西洋に於は十九才迄に生國之學問を仕上ケ候由孔子も十五才を三十才迄に於立之場に被爲至候いか様なる西洋の學問之仕方にや英之法承度候

○廿三日 快晴 窪田之書狀來る忠にして且勇遠く不及こと、感心せり○合原左衛門跡六十日に及へとも不出來いかなる故にやと日々相待居候万々一跡役出來候迄當分之内太郎心得居可申抔間違候も達し有之候とも此節之ミンストルは日本になき大役不世出の人に無之候もは出來不申必不行届出來趙括か俄に大將に成國を亡したると同じく大不忠也其節は腹

を切候も一向に申譯にならず決一寸なり共留學生之頭取の意を失ふへからす命を捨物笑になるはまだよし不忠に成をいかにせむ 上之御爲を存するならば御斷を申候も引込へし

○廿四日 晴 富塚順作昨日大病に相成候旨爲知來る窪田泉太郎之自書に於同人昨日出立之旨申來る○間瀬和三郎事當時戸田大和守本家を五千石 公儀を五千石一万石菊之間諸大名被仰付候由同人藩士之時面會いたし候義有之並ならぬ男とはおもひしか帝陵之事に於大功を立たり其余公儀に大功あるよしは曾不承候扱々高運且は 上之御恩難有事也○昨日を調繰太鼓并鳴物入之渡世御ゆるし也○五節句其外之衣類御改長上下并のしめのことなし諸大夫以上裝束下白小袖之由

○廿五日 晴 三兵活法寫本尋たるに一二ノ卷みえす板本之方爲尋たるに一ノ卷みえす政談二卷之内乾之方なしかゝる事纔之内にいくらも有こし拔嗟嘆に不堪是は虫干之節家來に爲取計其時一度宛主人不改故也○戸田

左近々明日午刻縁女内々引取候旨之使者來る○順作方へ貳百疋遣ス隱宅  
かも同斷也

○廿六日 微雨 昨日謹吾來る小栗之アラヒヤ産之馬荒て別當を食ひ殺  
し馬を壹疋蹴殺し其外怪我有之候而下馬所大騒之由尾臺良作來る巢鴨の  
近々引移醫を專にすることはやめ候由依而は宗伯可然且忤に逢吳候様申  
之其節咄に御旗本に而廿二三歳之人之由 殿中に而坐し居候脇キを通候  
人之脇差さや走り股の立場所不宜廢人に相成候由刀之長短は不承され共  
もしや此節流行之短キ脇差のとめを油斷したるかもしれす酒井良祐殿馬  
乘之短キ脇差を好むは怪我の種也と教屢有觀月院様古大夫御事御はなしに短  
刀をさし溝を越たるにさや走田の中は立其上へ倒レ怪我せし者を見たり  
心せよと屢御話也彼是おもひ當金吾之短刀とめゆるかりしと覺しかは即  
刻人を走らせて其事申遣し例之わかとめ一ツ爲持遣し候わかとめは中村  
八大夫之教也平日嚴重にすること太郎見らるゝ通也可恐々々國の産な

らぬ馬に乗普惠公の敵被捕候事左傳にみゆいはれ有ことなり全に無事之  
馬を異國人可出様先ツは少かるへし太郎歸府之上の一の戒也尤小栗之方  
は謹吾か風説を聞たる也尾臺之方は同人參候而病家之由也

○廿七日 晴之方 樂水院様十三回御忌御法事に付西村泰助大聖寺の參  
拜同日おさとも參詣右に付昨日は客いたす人々差支之由に而新家一同參  
る永田も同斷也○昨夕は内々謹吾家内引移に付一同被招候得共素斷およ  
ひ候使者遣ス料理并目錄など出る老拙夫婦料理來る○謹吾か方へ

妹と脊か千世をことふくともしら賀うや忘れぬを初なりける  
ともしらか千世のもとのわはいもとせか禮忘れぬを初也ける

禮和訓いやとよみ申候敬ふなどの詞も有はうやともよみ可申かよく人に  
聞へし戯に

いやと云うやとおもはず妹脊か朝夕に禮守りてよ

○廿八日 くもり おさと昨日佛參之歸り花盛に付上野御山内を通らむ

とせしに通るぬけは不成とて谷中門に被差留池之端にて茶をのみて店の婆々に間に異國人日本人の姿に成御山内を通り候故六ヶ敷成候由此節歩兵方の人々等と日本風の異國人をいかにして見分けたるにや感心のこ也○謹吾婚姻之祝ひとして謹吾へは太郎方に貫有し下緒壹筋奥方へは貴志をわれへくれたる縹子の女帯壹本を遣し候よめを之土産は太郎夫婦へ貳百疋しらか老夫婦同しく兒輩へは手みやけ之由に金百疋也

○廿九日 微雨 倉長之戦争去十月頃薩藩三雲藤一郎肥後藩秋吉久右衛門周旋に休兵に相成居候處舊臘に至又々長が鶴千代丸可相渡と之事にありろくも惣勢立退闔領長へ預可申と之事に昨今肥後立退候哉之風聞有之候由鶴千代丸は小笠原之世子か昨今と申は正月十日前後之事かたしかならぬ風聞也

○卅日 晴 十七歳之娘也とおもひし居し人槍劍の稽古を初候由實はこしもとをつれ一旦走候を露顯せしか也兩親往々御用にも可立歎とて悦居

候由診察にてもせしか其説詳也陰門中が突然と陽物を生し元之陰門は所在を失せし由也五行史などにはあれと近く現に聞ははしめて也何さまとかいひしかわすれ候醫師之話也

○卯三月朔日 曇 小兒殊之外健に成よく笑ひよくかたる○御門々異國様之銃炮に警固に成候上は銃炮には式有之ものに付其式を通行之節受度旨申候由風聞

○二日 雨 水野若狭守河尻式部少輔と屋鋪相對替被仰付候由○岡田備後守銃製奉行並被仰付候旨之吹聴來る

○卯三月三日 雨 鳴物停止中に付上已さいはひなし出生之方の人形なとくれ候人々之方へは夫々相當之禮いたす白酒壹升二貫五百文余といふ故に役割心得居と之事に白酒を自制し少々女共等に爲給候のみ太郎は万里の外新吉は原田へ参り三十日余になれ共節句過ならてはと泣て不歸

雨打けふり寂寞の極腰拔の難儀いふへからす乍去食物ジレコ、トヲ云二  
ヶ條を剛制したれば只のこし拔に未明を讀書を友とす來人もなし太郎  
旅中節句等故郷を思ふへしわれも又太郎を思ふこと同じ

○四日 雨又雪午後を全雪と成 常嘉來る漆器品々持來る小つかは貳  
分貳朱根つけは壹分三朱なつめ之宜品十兩也と云以前に見合壹朱程高し  
○五日 晴 太郎を思ふこと日々不絶決おもふましとおもひたるに聖  
人のみちならば忠義のために英へ斷然と遣し父子の親を絶といふは禪家  
なとに言ふことにお其節を不失はおもひ不絶方聖人の道なるへし○小兒  
頃日折々泣こと多きかとおもふお花は別條なしと云され共爲念醫師の方  
へ遣したるに少も相替ることなしすらくと成長すへしさて平日あまり  
だくは悪し成丈抱へからす虫の毒也といふ○朝比奈甲斐守外國奉行一方  
に御勘定所の方のきたるよし也

○六日 晴 昨日大越參候お太郎英の參着之旨御殿に承候と之事元來

十日過なるへしと思ひ居候間驚喜候お書狀を待居候内虎之介持參せり太  
郎之書祖父已來秘傳之筆法にて加之草書躰有燈下眼鏡に六ヶ敷虎之  
介によみもらひ候年始狀に當正月四日英八月附也十四日廿八日迄英  
へ上陸之ことなしおもふに御役所に取落なるへしと委細虎之介の申  
含遣す○英人之深切薩人の御逢被成候情躰龍動之繁花等聞として不驚こ  
となし海上一度之難船もなく陸のことく日割通之着とは神の如しといふ  
へし○虎之介話中之由市ヶ谷唐物屋の強盜入伴頭其外手負候由なり此節  
之強盜白晝又はよひのうち也市尹に一人も召捕候沙汰なし大息々々○  
今日淺野伊賀其外之狀侍使に遣す戸田以下は便次第遣候積なり○野田  
は上野車坂下御徒地面之内に先月廿二三日頃か轉宅謹吾は野田引越之節  
參候お手傳之もの遣し候由等追お承

○七日 晴 昨夜十二月廿八日附にて龍動着之御書狀并十二月十四日  
同廿八日迄之御日記來る先以險惡之洋中西洋夷もめつらしと申迄之天氣

都合に御着之事大慶々々老拙禰上にも心痛之一同倍増之御辛苦一ツ之御奉公かと大に喜び申候英人之世話行届候ハ繁花をけしき其外逸々驚候事而已也其内別ると感服は一台場に八百門之大砲を居たる國力之程可羨可慕海軍之師宜敷人にも大慶也張良は初行逢候黄石公之履を取たり況大君之御差圖にも傳習受候師なるをや諸事誠を以朝夕御突合諸事無隱御咄合候而師とし御仰可然候されはとて御國禁其外等之事堅御守候而嚴正に御修行可然候根元利を主なる國と仁義禮知信を主被遊候御國と本領大に差別有ことに付須臾も聖人之道と御國恩を御忘却くれくあるましく候

○八日 くもり 箱森吉田古橋之非常手當金此度箱森古橋は貧人共ハ麥の損にも皆無となれり吉田村之名主組頭に而出金いたし七兩其外之世話にも元來之手當金三拾五兩之上へ改而可取立アメリカ騒之節新吉郎逗留中之手當として渡置候五拾兩を加へ利倍にも非常手當之内に組入たれば

差支なく且暮入用之内蚕時分金子殊之外にこまるよしに付此節無利足にも金百兩遣し七月ハ十一月晦日迄に月々貳拾兩取立候積にも救ひに相成候哉と尋たるに村役人連名之證文こしたれば明日差立これにも手當によし箱森古橋之方は何分救方考なしよりて陣刀を市三郎望む故に同人に五十五兩元直段にも讓遣し夫ハ拙老へ被下候隱居料百兩を加へ合百二十兩無利足二十ヶ年賦にも貸遣し候右にも村役人共非常手當之元金を爲取立候積爲取計右之百五十兩は取立候都度に封し候而村方手當に行末永く貸遣したらは可宜と其旨村方ハ相談として遣候積也此節風聞ながら關八州小給所之分不殘御取上ケ御藏米に相成候よし其時は百五十金之損なれ共多分之隱居料被下置候事故右を以御料所之百姓へ施スはせめてもの事也太郎御了簡にも兩村之救方有は御申し可被成候

○九日 晴午ハ雷雨 野藪山マユを以蚊屋を造りたらは雷除に可成と云説エレキテルハ之考也西洋人いかに序に記ス犀角之眞贋厚朴の佳品漢土

は絶たれと外にあるへきや否○知行所の金百兩差立ル是は上吉田村也委細前記○隱居所のお花を招家來共にも肴遣ス是は太郎英へ無難に着之事あまりの嬉しさに内祝せし也難船之手當いらぬ計に亦も大キなること也○十日 晴 此節いさゝか藥効有之候か坐中いさり候事小兒のことくするは随意也繩床へ上ること少々人に手傳を受候得は出來人に被頼候而短尺を認たるに以前はよろし

○十一日 晴 來人なし市三郎に刀爲拭脇にゐいろく申なから一覽此事病中害なきの一番也此節貳尺位之小刀はやり長キ大刀多し今は無用之長物とは此事也しかし賣もスリ上ルもいや也ますく無用之長物とはなれり

○十二日 晴 此節歩兵差圖役に横文をよむものなし調練之仕方等誤多し議論に成ても歩平頭に差別を附る人なしなど申惡説有と云英調練之賞罰を都而之曲節に至る迄全に英人と同様に詳ならずは太郎彼地へ參候詮

なかるへし歩兵頭之勤向十分に學問すへし理學天學見聞之事見聞なから心を附るは可也兵學航海等之事を第一と修行せぬは最以不可然候おもひ出候間附之

○十三日 晴 今節薩州にて令義解リヤケある國學者をたのみしらふるよし也是は令ノ内に軍防令有夫に付調練の辭有一寸よめ兼ねるものにも荷田東麻呂と申享保の頃か古學者しらへたる書も有以前夏かけを借受よみしこと有元來余國の詞にて差圖其外軍律等ヲすること有かはしらねと其法を學によりてわか國にあらぬことはを遣ひて令なと下すといふはイキリスなどには有まじきかとおもへりこれ西洋學の意に薩人之通曉せし故なるへし似て非なる誤を守る類と申しかるへし

○十四日 くもり 向山榮五郎事某若年寄之格に英のミンストル被仰付候由いまた京都を申參たるには無之候由風聞までなり○今日明史紀事本末をよむに崇烈帝天子になられたる時に出數五百余万歳入不過三百二

三十万と有かゝる天下を譲られ其時宰相に受に人無之李自成か檄文にも天子ノあしきにはあらず宰相無其人とかいひしを人々扼腕せりとかみえし也

○卯三月十五日 晴風 (新吉郎手跡師へ弟子入いたす麴町薬師横町新吉郎學問手跡をはしめる手跡之師は麴町薬師横丁<sup>三</sup>リ<sup>ノ</sup>ヨ<sup>シ</sup>カ朝比奈三喜と申候勿論和様也今日弟子入いたす貫一道五郎供に在る中間に物爲持參ル我七才之節田中半助殿へ弟子入いたし候節は酒屋之御用一升入之箱を下ケ行道院様に手をひかれ参りたり其頃は晦日錢六拾四文五節句に二百文宛之附届也けふは金百疋有合之白木臺にのせて行たり七才故町の子にいじめられ日々泣て歸りわかことを内藤ナキチと迄にあた名せり日々道五郎を召連行故夫等之氣遣ひなしこれみな 君恩之余澤なり難有ことも也太郎等此節盡忠致身て祖父の少も 國家之御爲を不成償をなし給はるへし素讀之師は林三郎と申候松平金次郎か跡役也

○十六日 晴 今日日は五ツ半頃を段々人來りて暮六半時過迄對話せり健に成たるとみえて少もつかれなし○長州内實大に疲弊して今一度攻を受たらはいかせむと申せし時に大喪に在る解嚴に成しと云説有左もあるへし○岸大隅不快に在る暫引也虎とわか説と異也しかるに今日を登 城之旨奉札來る○謹吾妻今日里開キ也

○十七日 晴之方 尾臺貸くれたる西洋を謗たる書に月も世界也と云を非として月中の水をとるといふ説有良策に以前も月を水をとる説に迷ひてとれさりしことを云しに艾を置いて玉をかさしとれは艾濕るまでに潤とるゝ也これ其證也と云西説いかゝ万丈の水一寸之磁器にしみす火は一寸の火にてもものをとかす也これ水火之差別也艾の説いかゝ有へき

○十八日 微雨 三折出府せり羽織は出來居候外とも違ひ法鉢醫業之義口實あらは直に可遣旨申論候○本郷之家主は重兵衛再勤之義斷矢張五人組持店之積今日申渡風聞承もらひ候處甚以不宜故也○此節錢貳朱に九百

文と成諸色彌騰るへし

○十九日 晴之方 御勘定組頭後藤一兵衛西村環助被爲召一兵衛は不快環助は御廣敷番之頭に成候由其外四十人計御人減と申こと也○昨日淺田麟之助來る人物格別に立まさりたり○月中之水艾を敷並へ月を日のことくにして取は艾潤と云説有不審也と申たる也夫は月の水氣にあらず夜氣の潤ひ也と云左もあるへし世界は丸し夫故船段々と不見と云然ルに遠目かねにてみれば三十里内外之船は必見ゆ長崎遠見番所是也地段々と卑ク、なるならば遠目かねにてみゆへき譯なし是は如何と申て尋たるに答不分明也太郎考如何此節此ことしるせし板本世に被行候

○廿日 雨 太郎事殿様育なること可賀且大に可歎之至也然に此度之御用にも百事みつからし異人の心かね指揮の役をもいたし心を用ふること多し依之心をつくれは日々に横文字の外之眞學問甚多譬之山石を堀出し打碎キて火にも入レ水にも入百辛苦ヲつみて精金となる也これに同

しこれわか喜び也世に御旗本と云もの江戸に生れ諸家に尊れて人情に通することかたし外藩の人異人の情書面とは大に違へりよく人情を知れば追而御政事の端に預る時一人のみこみにて一通之令條案を記し得たり顔することはなし畢竟人情にうとき故に不被行ことを仕出ス也此節横文字外其修行大益也

○廿一日 晴 令講義と云書八冊有薩摩府學藏板栗原信充著ト有日本古代の軍防令を主としてしるせしもの也此節から者出來するは心有へし太郎に見せたき者なれと遠方仕かたなし其書難解ことはみゆれ共にしへは斯也余國のものを學に不及といふはなしにはよき書也こゝろすへし火藥は有ましと云或は弓矢に誇る人には話にならず

○三月廿二日 晴風 市川弁吉京地へ出立に付暇乞として參る○信濃守昨日來る○飯田町に布衣以上之御旗本の武士突當りさまに御旗本を及打擲御旗本之旨相名乗候處異國人なるへしとて一向に不聞入彌御



旗本ならば馬より下り相手に可成旨申候處御旗本は相手に不成乗切候も被參候由此節此類間々有之候由馬強に乘倒たるもあるよし也一橋御廣敷用人方押込入金子奪取候由御届有之候由信濃守手にあも度々召捕候由歩兵多く加り居候由先年農兵出來候節太郎に宋朝の躰をいひしか御覺あるへし

○廿三日 雨 明末李自成か亂をみるに李自成世界に横行し崇烈帝夫か爲に責殺されたりいと強キ兵力のことなれともよくみれば百姓一揆のこときものにあさしたることはなしされ共明の朝廷に人なく天子先ツ獨斷也故に百足の虫に死に至るまで不倒と申古言とうらはらに成たる也兵も多あれ共規律不立責罰不當之事多し天子英主也と所々にみゆいかに英主なり共役々に組立たるか如くには決して不行甚敷不釣合多し夫々色々之間違起る也明に名將ならずとも可成の大將あらは自成直に誅せらるへし夫は屢敗るゝにて分ル也われ自成を憎ますして明の天子英主にしてよ

き人曾る其職にあらず崇禎天子十七年あかきくるしみて社稷を失ひ縊死にいたりしことを深くおしむなり○土屋大膳忰步兵差圖役勤方並被仰付候旨淺野伊賀守陸軍奉行並に如元御勘定奉行兼帶被仰付候旨之奉札來る○戸田與左衛門西丸切手番之頭被仰付候由三百俵高布衣以下なるへし横濱修行人未成業に其職を去ルもの家督は不被下旨之局法相立居候旨大膳亮此節承出し肝を潰し當惑之由乍去御役と申はみな 上へ出候事に足利かみつから征夷大將軍に成たるとは差別有へしと云て笑ひし也

○廿四日 晴 明廿五日は戸田謹吾方新家におおさとおはな參る新家よほと簡易之由され共いろく手數相懸さて女の客はうるさきこと也○父子親君臣義夫婦順と申は五世界中自然に同じこと也しかるに謹吾は父子の味をしらす遺腹の子に養父と別居なれば也これを別段爲申聞つもあり也

○廿五日 晴 戸田へおはなおさと參る○新吉郎師匠方に席書いたす

いろはの筆とり初めはつかの間也一樂古人心と唐昏半切へ書たり師につくは不思議なるもの也○少々快雨三日は人の手傳なしに繩床へ上り下りいたす昨日唐昏の詩作をかきたるに足なけ出し故難義也五分通復古いたし申候字曲り不申常のことしどこにか精神残り居るとみえたり  
○廿六日 くもり 昨日之客六ツ時分に相濟歸宅是は夜行をいとひて也謹吾妻とおはなの釣合よし凡之躰都る太郎の謹吾に置くか如し當年十五才にありまた世なれす温順なる躰也との事也○青村を書狀來る窪田申分も相立候哉勢ひよく歸陣長賊も恐縮近國小諸侯等別々悦候躰也○初松魚壹分貳朱なり諸色とは大不釣合也これも世躰をしるの一ツと云へし  
○廿七日 快晴 青村を廿八日附之狀來る○窪田出精に上京いたし宜御差圖も有之長賊恐縮之躰に西大小之諸侯申合長賊に横行は不爲致積よりて一躰穩之由正月之狀にありは小倉一同熊本へ立退候由兩三日中なるべしと之事也しか此節は打てかはりたるけしき也有詩爲證この事此間中

に之悦也

○卯三月廿八日 晴 おはな淺野へ參る○永井玄蕃殿は朝鮮へ御使に被參候由是は朝鮮と蘭夷戰爭之上和睦いたし候處過分之價金を可差出と之事魯戎は朝鮮へ荷擔いたし援兵を可差出旨なれ共不能戰され共金子なし日本證人ならば和睦之上即金に無之も相濟候由に朝鮮を使節船差向大坂へ參候故之御用之由風聞也○白米百文に付壹合に成是は錢世上に多く直段貳朱に壹文にや、近く成し故米直段をも引上候由諸色之騰貴右に准ス○井戸普請カハ木三寸厚ならば三十年壹寸五分ならば十五ヶ年受合いかゝいたし可申哉と申たるに勝藏云此節之御評判にありは十五年相立候は、御屋敷必手狭なるへし三十年には不及と之事に五兩減し十五年之方に定たり元來は三十年保之かた益也都合四拾七兩かゝる當感せり十月迄立替と成へし或は在光之刀殊之外平田所望に付遣候る十七兩之立替にいたし可申歟に候在光二尺一寸にあり出來よろし此節之相場にありは百金

之ものなるへしされ共又々よき刀あるへしなくは太郎歸候も平田と示談  
之上可取戻余程之良刀に而且殊之外輕し可惜々々

○廿九日 曇 貴志大隅守を呼候もわか御役御免願候節之始末等委細相  
咄決る日本人は職を辭する唐風に難成旨等存意申述る○横濱限之人々に  
百文に付壹升に而米賣渡度旨異人共相願候旨其外非人は人へ米を遣し人  
足に遣ふ故に多く集るよしの風聞○此節紛敷貳分并壹分之金銀多し西國  
筋も出るよし也○異人共と大坂に而 御直話有之其御英明なるに奉感候  
由其筈のこと也とは乍思何よりうれしく且難有也

○四月朔日 雨 横濱新聞番初集二集をみる當正月二月附也各國の事を  
記すこと例之通に而引札のときものを末に記し有英學有志之諸君子は  
拙宅へ御出可被成候百一番英國教師へーリリ口中一切療治仕候百八番ウ  
井ン黒江屋友七此者儀已前私方に而番頭に召仕候處子細有之暇遣し候間

此段諸人の報告申上候亞國ウエンリート夫を反物沓書籍其外各國各肆各  
品みな記し有此躰に而は英に而買來りたらは存外之損有へし以前南都に  
而墨を買ひ或は堀之内に而玉子竹之子の類を百姓屋に而買ひ損をなした  
ると同しロントンの直段附を取候もくらへみる上之事よし水野若狹はた  
のみて突合候上之事なるへし新聞番は大半番摺に而定價三百銅と有○水  
野若狹横濱へ家内引越に成此節出府也謹吾を呼に遣し同人を野田之事爲  
申談候積○横山紀伊守願之通隱居家督無相違鐘三郎へ被下候旨之爲知來  
る

○二日 晴 新吉郎林三郎と申近邊之人に素讀之弟子入いたす○横濱新  
聞番によれば朝鮮に而フランス人を殺したるに付同國のミンストル襲撃  
して却る大敗いたし四十五人死したり右に付戰爭に及はむとする場に成  
たるよし也朝鮮人に感服せりよき手際也○この四五日押込み沙汰止  
○三日 くもり 水野若狹家内一同横濱へ引越に付謹吾呼候も若狹守方

遣ス是は同人留守中野田取計をあらかしめ談判爲致候積也○お花昨夕  
歸宅也八木も上かたを歸候由也同人出立前 上之御召は黒ちりめんの日  
本風の御小袖羽織チャウの御袴也也しと云○淺野中書隱居之支度に日  
々遠馬ヲなし樂しみ居よし也貳男調練太鼓の修行に參るに兩三日已前を  
野羽織袴に成しよし也

白米を貳割  
増せは兩米に  
直せは兩米に  
三斗壹升貳  
合五勺と成  
九拾兩と成  
之相場か余

○四日 晴 昨夕水野若狹守來る同人今朝出立家内は十五日引移と云○  
外國を米を持參こと二万五千石也と云白米貳斗五升相場也と申也二百兩  
に當ルか玄米昨年之税金六十萬兩に及ふと云交易之利如斯よくなしたら  
は國大に富へし

○卯四月五日 晴 小兒彌よし案事なし朝々婆々に被抱來る頬肉厚且か  
たし梅堂云兒耳目太郎似運よかるへし併ふとりてきりやうあしく成たり  
と也其說のことし○われと太郎日々之話此日記に在川路家に長傳ふへし  
これ一喜也

藜羹不飽雙回食 温葛難全百結衣 我輩常依此膏血 憐看施惠勿令饑

結纓仲由死 易簣子輿終 誰道既耆屢 何時莫檢躬

○六日 曇之方 太郎英の參候上は老人豈可期面會乎よりて日記をしる  
す祖父と孫日々之話川路の家に傳はるは一喜也

○七日 くもり 設樂八三郎御目付被 仰付候由○太郎なと留學生と成  
三ヶ年之間少も脇目すへからす一生の太行此内にこもれり

○八日 雨 此節日々捨子行倒死人之訴有しかるに總州大雨雹每寸數日  
不消米又高直なるへしと信州書狀之末へ嗟嘆して記ヌ○新吉郎手習に行  
に長合羽に在道五郎にかさをさしかけ貫ふ由を聞て大に叱りたりかくす  
る故に世にとのさま藝と云もの出來しもおもへは太郎幼年之節なと此甚  
敷もの也然ルに天幸に在今般異地之御用其惡臭消散して天下之御用に立  
老拙の欠を補くれはわか喜ひ何以譬之數年面會なき齒牙にかけて論に不  
足太郎此節一事ことに 御國恩に報する也難事也○松平志摩病氣差重之

奉札來る傷寒之由也

○九日 晴 人に水を治ることを問はて夫は天下富ねはならず堯土階茅軒の德繇八年禹九年の入用差支なきにて知へしさて水行は其土地の人ならばよくは不知故に爾か生國をみよ立派なる士を代々三人迄土着に被成置たるにて昔人の深く心を用られしを可知といひしに其人三人か害を段々云故にわれ云御法はよし三人か流弊させたる故に弊より害をなすなり夫故に聖人不愆不忘舊章に隨ひよるとも先王の法に隨て愆もの未有之とも御教ありし也堯舜禹の治万世といへ共不愆不忘ならば太平なるへし夏の五百年に而湯に亡されしも段々と先祖の法をあやまり又は忘れて小才覺の人おもひ附をなせし故也水行を直すには地之利を不貪以前之法通にすへし別段の考はなし水の度々に水行の元形を不失様に心附事なき時よく心附て寄洲の類をさらへは元形と少々宛ツ、の異同にて濟年々に水人家へ上り田畑を流すこと決りなしと申たり○小兒さかやきをすりたる

に縁に而かつらの如し至る可愛兒也人々云眼太郎の如しとけに然りよく笑ひかたる也○白縮緬壹反阿花に遣す産の時もまいらせ候夫にも及ましといひしに太郎留主中外出等もせず其つれ／＼を慰るかためとおさと達而之願に附遣し候阿花を申遣す時に太郎可怪かと詳に記す

○十日 晴 淺田宗伯來る 上は御逆上被遊候に付如元御月代に被爲成候由風聞か醫師はなしかは不承○わか病氣スハリたり杖に而往來する位には可成良作か薬は攻撃に過たり今は氣血を補へしかく云は宗伯か薬をすゝめたかるかの嫌疑あれ共左にあらすと云口中かはくも附子故也下劑尤惡しといふ最初を醫論かくの如しいかさまにも乾は甚し曉に丸薬をのみ五ツ頃に口をツ、キカツと云と腕中をすゝの如くにして碧青なるものを吐けり濕なき故に丸薬腕を下へ不下暫の間故にとけて右之如くになりしなるへし

○卯四月十一日 くもり イキリスを醉狂人か切殺といたし候而被補候

もの町奉行に御咎申渡有之右に付信濃守方の内聽としてイギリス參る畢而信濃守とイギリス對話イギリスは例に通イヌ信濃守は將木之由イギリス日本話よく出來候而少も差支無之候由信濃守之申渡書もらひ參候由也○醬油一兩となりたり大根壹把貳朱也

○十二日 雨午後晴 南京米追々來ルに付米三百貳拾兩に成しと云○順作死して親族之内悔に參候もの之内卒倒いたし手足も不動はつかに息有而已也衆醫いろ／＼評せとも藥くるものなし日數十二日を経たり如死人惡臭に不堪候由しかるに壹人の醫斷なからもしまかせ吳たらは一療治せむと云故に申に任せたるに酢を煮返し惣身をふき入湯させて多く夜具をかけてねかしたり暫有て病人手を出し頬をなて候由小鼻落眼くほみ落入たる病人故死人に魔かさしたるか人々疑たるに暫有て病人自身と起返りたる故に一同ます／＼驚たるに飯をくひたしと云て二碗を喫しはつかに三四日中に快氣して歸候由西洋傳染病に而療治殊によりしなるへ

し一奇と云へし

○十三日 くもり 信濃守來る豊太郎かことによりてなり○太郎英に而病氣の説紛／＼夫は中村の間違之由謹吾來る英へ參る御受いたしたる時覺悟は有と大に驚て信濃守申も謹吾に同し漸に胸おち附申候

○十四日 晴 此節横濱へ天笠支那の米多く來りて江戸米下直に成よし也とくに多く交易したらはよかるへく市中に而施金を以十萬兩も買ひたらはよかへき事<sup>る脱カ</sup>を可惜也

○十五日 晴 井戸普請出來水流其外之繕ひに而は五十壹貳兩に及へし○蘭御船出來に而傳習人歸候由都而行届たることによしカナ物都而金無垢也蘭は七十双替に而日本下直と之事以上清兵衛話也伊三郎を思ひ出へしと暗に對話中愁傷せり

○十六日 晴之方 万喜女くひ初のいはひいたすに付隱居所に而一同晝食事いたす○佛人警固に別手組之人々例之風俗に而參りたるに日本風刀

劍之式を以警固受たしとて及斷別手組之人々こまり候由かゝる類之はなし色々有いつれか實事なりや 老後述懐

若かりし昔を今にくらへつゝ衰行ける身をなげくかな

越後榊原領分へ長賊海を來り大騒に寄合衆四番隊迄出立せしと申也

○十七日 晴 穩なる日也御祭禮日難有事也○此節足は如舊なれ共氣分宜毎朝ヒストンの素ため百脇差之素ふり百いたす終日書をよみつかれを不知よりて表坐敷迄イサリ参りたるに容易也顔色はよろし彌片輪に成かたまりしなるへし○淺野伊賀守若年寄陸軍奉行被仰付候旨奉札來る○英を正月四日今日まで便なし唯其事而已を待中村慶助宅をも同事尋來る

○十八日 晴 八木但馬守願之通御役御免之旨爲知來る

○十九日 晴 水戸三派に分レ今に穩ならず右之扱戸田與左衛門に被仰付候由同人は此節西九切手番々頭也○豹藏來る同人在所に父壹人に成身

上不立行に付退身いたし在所に參父を養候積之由也孝行希なる男也され共今轉役いたし三拾貳人扶持之御家人に成居に付父を江戸へ引取養方有へしとていろく相談いたす○敷田大次郎岡田備後守其外九ツ時を暮六ツ過迄客來六人有

○廿日 くもり 此節市中之もの追々衰たり市三郎方臺所に來り一椀を乞もの日々兩三人有無際限故不遣其内小兒オツカアソコに御はらか有くと云て指さし候て泣よし下女までかあはれかるなり

○卯四月廿一日 くもり 脱走して大名に御預に成し公家衆此節は京都へ歸元之官に居候由御預り之大名に十ヶ年之入用を積り候一人に付米一万俵をくれたり右をみやけに持歸候而京市中へ施し殊之外に難有かりしよしの説有○石川宗次郎來る同人御勘定組頭に成しよし也右之吹聴也○徳宗紀唐藩鎮を伐し時袴を切て一キレ宛被遣恩賞に被替或は大將軍告身換一碎など之説有夫より奉天へ俄に迂幸のこと有詳に中村先生に聞可

被申候

○廿二日 雨 日本には官家の取扱有然ルに公家衆に而は若御自分に不都合有は勝手の例を引也 昭徳院様初而御上洛之節官位順になしたるなとは足利家にもなき 將軍家の御取扱也知らねはかゝることも有なるへし尤其頃は深キ 思召も被爲在候而御忍ひも被遊たるなければ御別段之御事我輩の可論事にはあらねとも御家來たるものは先例等を悉に調へ置たき事也しかるに日本の學問するもの少きは不思議なること也 檀迂大學頭之屢夏蔭へ急に問れしにても知へし西洋などに其國當用の事を捨て専外國之事を學ふこと有や太郎此節和學有はよほとよかるへし如何○アメリカ人贖百文判をもち來る町人共は知りて不取貫一三百文之損をせしと云

○廿三日 雨 出生之兒ますく健也一旦病有しか其病治して後少も病ひ氣なし○昨日夕方を表坐敷迄イサリ參る短冊其外認候

○廿四日 くもり之方 新家鏡作出府之旨申來る右之狀正月出に而十日はかり前に届くしかるに今日着也此諸物價高直之處夷地には纔に一年に而空囊なるへしいかゝいたし候や今より困たる事と思ふ也○氣分はよろし日々筆研を樂む足は太郎被見候節と少も替りなし片輪に成かたまり仕かたなし

○廿五日 雨 梅雨前に付野田を爲手入刀腰差取歸ス順次郎來る熊を打留たることかたる十六才なれと鏡作を丈高よき兒也騎兵にして遣ひたらは相當之もの也貴志へたのみ遣ス

○廿六日 曇 昨日金吾來る同人小川町歩兵屋敷に而は口利之由よつて殿敷世途六ヶ敷事を申聞遣し候品に寄開成所之行かもしれす○此節之咄に高きやに昇りてみれば烟立と云て下ノクは何といひしや尋有しに口を揃てそれは不存候と答けるよし

○廿七日 晴之方 兵賦差出候様御勘定所を達右之かとは歩兵頭に例も



有之に付差出に不及旨留守預るゝなて付其旨書面に差出右に付あは健藏  
屢來る同人忠實並ならず感伏々々

○廿八日 晴 少々風邪何分にも手跡如醉言語又不分明に成候○宅狀久  
々不參夫にいろゝの説も有病氣不出來かたゝ塞臥り居候處虎之介宅  
狀日記町便共携來り候妄慮忽に消散平安二字明封之前を勢を得よみな  
く喜ひ申候唯可怪は去年以來八タヒ書狀差出日記細書三十枚に及ふへ  
し然ルに一度も手に入不申様子日記にはいろゝの用向も記し有江戸の  
様子承り候積太郎より今般之日記とくに可參を小遣ひ忘たるよし昨日虎  
之介穿鑿之上分ル扱々御役所等閑なること也

○廿九日 晴 井上來る今日之御役替をあてみよとの事也平山健次郎若  
年寄格被仰付候旨也知れぬはつ也健次郎はわか五十二三之節御徒目付に  
成遠國者也と其ころ聞し也

○四月卅日 晴 井上參る相變候事無之此節召捕候押込いつれも人物に

あ珍ら敷はいつれも禁酒に遊里へ參候を差止候事之由

○五月朔日 晴午後地震○米貳百八拾兩を上米二百兩位之由也

○二日 晴 英の書狀差出候は去年十月初旬已來屢なるに一度も届不申  
けしき不審千萬也よつて留守預りへ申遣し且謹吾近々横濱へ參候節委細  
相尋候上差出候積也○平山圖書頭は淺野美作守同様諸廻勤其外無之旨之  
御達し也御役名若年寄並外國奉行とあり美作守は若年寄並陸軍奉行也○  
評定所留役御勘定吟味役格などに似たる事なるか

○三日 くもり 一兩日騒々敷話なし安心は少もならずヒストンを改め  
夜具之内に差置寝る也

○四日 雨 此節は布衣筆帶の士にても人留下坐に而 登城いたし殿中  
は坊主衆御先キ立いたし町奉行等平服いたし候も立なから挨拶いたし  
被行也既に平山氏などはわか御勘定奉行之節御徒目付に成し人也辭鼻へ

かゝるか如きくせ有諸生めきたる人に一す見誤ると遠國物のことき人なりき勿論 御直參の御生れなるへけれ共いさゝかも邊幅を治むることはなき豪傑故にかくなるへし若キものいか様にも忠義をつくしかくはかり難有御世に出精すへき事也

○五日 くもり七十六度時一字 端午之禮家來共麻上下也英之事いかにやと一滴の菖蒲酒のみなからおもふ也佳節之旅情摩詰之九月九日之詩盡せりと云へし○新家酒を止め候由少々不快も有且一醉二々文ツ、にては十分ならずよりて禁酒並になりしと云

○六日 晴 新家順次郎を戸田へ遣し乗馬爲致候蝦夷に馬を如犬乘廻し嶮岨を乗候けしき謹吾恐怖之旨申來ル○昨日新吉郎を戸田へ遣し申候馳走に成悦ぶ歸候

○七日 晴 交代寄合菅沼氏自分入用にてイキリスの參候由也○京都へ薩州其外之諸侯相集候由右に付るはいろくのこと有之候由依るは巷説

等有其詳ことは不知

○八日 くもり之方 小兒彌健也醫師をいたし方もあるもの也太郎平日身の養ひ方別る心得有へし○此節押込沙汰静也○辰五郎昨日雇五人差置百姓辰五郎にて内實井上抱屋敷守いたし宅に馬を差置中小姓をもちいたし車を持居こやしを運ふときは車引をもちいたし都合なる事之由也

○九日 晴之方入梅南風也 此吹返し六月來り去年のことくなることを恐る○頻に京都物念之由を申○英之書狀不届長峯良三郎土岐虎之輔世話なれ共英人に渡り候迄之内等閑なるや否やは分明ならずいろく心配いたす

○十日 雨 幸三郎隣家之由に承候森泰次郎一昨日評定所へ御呼出御扶持召放に相成候由泰次郎は幸三郎同居人にて御吟味中之ものなるへし幸三郎右等之ものを同居爲致候も不審也大に驚く

○十一日 曇之方 窪田泉太郎が四月十八日附之書狀來る無別條京都に

罷在候由薩土之者共多人數參候得共下輩之者口論位之義は有之心配筋は無之と之事也右に付江戸に在いろくの浮説取にたらさること相分安心せり

○十二日 晴 今日甲子也梅雨中晴に在加之麥作よろし土用中之天氣いかと案事申候○順次郎を辰五郎方へ遣し馬に乗せたるに辰五郎之説に窪田に似て一段よろしとて大に感したり

○五月十三日 雨 昨夕英々之宅狀相届二月五日同廿二日附也家内一同相集候あわかよむこと例之通也元來日記はかりも既に七度出したるに一度も不届不審に付差出方如何いたし可申哉と勘弁中此度はケール之始末等御申越それには右七回之日記等も可相届可申と大慶此節はみな御覽なるへし扱英之行届たるロントン之繁花等驚入候計也天工には無之人力也日本など往々いか様にも強富の御國となるへし只々御人々先ッ富せらるゝ事をおもふのみ也先以之第一は太郎健に在且出精之様子一に養生

二に出精此事病叟之朝夕心懸り也其次は無用之究理學等いたすへからす其大夫賢者につかへ其士之仁者を友とすと有人を選交ること簡要也此節之躰にははいかなる御用可被仰付もしれす其時の爲に暗に平日御心を附らるへし言忠信行篤敬を主とすへし少に在も右に反すること有へからす○十四日 晴 西洋人に易をよむ者有や是を傳ふる人ありや○此節時候に少々當り起臥不自由別也

○十五日 雨 今日宿抱地を掘たるに元文金千兩に不足瓶に入有其瓶も少々損したり元地主へ懸合たるに記録には千兩と有ともはや四代以前之事一向存寄無之當地主を一已に取計可申旨申に付訴たるに先地主連名に可訴旨之沙汰有之候由少々不足いたし瓶損したるは已前穿鑿せし時事なるへしと風聞大造之金高となるへし

○十六日 晴之方 昨夜虎之輔來る英々之御狀并原彌十郎阿花寫真三枚御日記來る飯を食かけ候婆々迄駈來り日記を讀候事を承る例之通也可怪

は宅狀凡壹ヶ月に兩度は出し日記も七番迄遣したるに御覽無之躰いかなる事にや當月は水野へたのみ遣したためす積也

○十七日 晴之方 此節八十三四度也是に而推參らは相應之暑なるへし  
○太田道淳殿去ル十二日病氣差重之由此人廿三歳之時内外打明し談有之隱居後も太郎知らるゝ通也大久保加賀殿其外已前之人みな黄泉之人と成今は世上に壹人もなし愁傷甚し依而今日は不快も不宜候只ふさき候計也

○十八日 風雨 諸役人に勤仕並はやり也併隱居か勤仕並には不被成よりて自号して位牌イ並とす朝の茶は茶トウと云か如くにいたし置也さすれは食物に少もうまきまきなく寒暖の論なし何を云ても成程々と云常には静坐の心得に而易は無思也無爲也と云ことを念し居る也夫に一奇談あり養生のことを都而御位牌の供養せよといふ也其内金玉を洗ふ金玉供養と云たるに一同噴飯せり

山高其外に  
万里外に  
御達其喜ひ  
知へし其別  
知又し其へ  
らし其人に  
知らされは  
不

○十九日 曇 昨夕三月十九日ロントン發之御狀日記來るソレヤ御狀とて婆々其外迄集り來ること例のことし日記をよみかゝりたるに咳強く出不能讀これ三十日來のこと也よりてしはし平臥治りて讀之民部大輔殿ハリスの御着有之太郎罷出御懇之御様子等圖迄被遣候故別而詳に承知難有事江戸に而は決るなり難し五十里外を日附いたす可驚々々國地之人々に御逢諸事御聞込之義等氷解せしなるへし右に付而も可疑は何故度々之日記滯候哉七度出し置候日記二度ならては無御入手いかなる事にや何番不足何番着と申義御記可被成候

○十九日 雨六十九度 不快何故にや變りはなけれ共めし何分不進也一盃ト少々位の事也これは不時候に閉られしなるへし既に廿日計に成中風之方は少もかはりなく精神健也太郎可恐は病氣可養精神也食物其外共御心附ケ可被成候

○廿日 晴之方 午後新吉郎卒倒みるゝ手足引つめ面躰浪立かことく

動也所々へ人走らせぬ白熊膽即効有と用ひたるに追々ゆるみ人々大に感す

○廿一日 くもり之方 新吉郎大に快し氣うち如何と問ふ故太郎は与風歸り遅キ時無余義は知なから動氣する百分一位と云に人々笑ふ父母は只其疾を患ふ万里外も咫尺も替し事なし○成瀬對馬守其兒病氣之節太郎別段之世話に成候由ヲ以菓子くれ候壹分貳朱位 塚原但馬守英ノミンストル被仰付候由に付使者遣ヌ五月末之出立なるへし其内上京をもいたす由也○廿三日 くもり之方 尾臺并平澤共に來る拙不快時候當に而食の減したるも無程直るへし少も心配之事なしと兩醫口を揃而申之○官便之宅狀出之日記は飛脚屋便に而差立候積也○土岐虎之輔少女之死したるを歎て挂冠歸山之情頻也人々とゝむれとも不聽と右に付今日呼寄心得違士道に如何之旨及議論○昨日戸田謹吾來る濕瘡うち藥に而大に宜と云昨日初而試歩せしと云

○廿四日 くもり七十九度 今朝霧深し午後快晴なるへしとおもひしに不勝之天氣也六月に至り候を失はぬ様いたし度○昨午後少々長キ地震有勝藏淺草へ行たるに宅之人々駈出し天水涌溢るゝと云番町は地震に耐る地なることを知得たり

○廿五日 くもり 昨日を段々痰も減し食事相進み二椀半ツ、喫ス是に而太郎心配に不及○昨日井上を自書に而申來候趣は尾臺之藥中風には相應也され共政事と同じく味之有もの也順補劑を以補ひ度事也別懇を以淺田忠告するよし也此意淺田は常に有然れ共尾臺之藥に而少々快設劇劑とは申せ共さして強は不存出生已來下劑計に而既に七十年に近く過たれ共あしく存候事無之貳人之良醫異存なれ共いつれ之藥にいたし候ともハタ藥を不吞とも三十日前後に而善惡之効可分症にあらず故に居置候積之旨申遣し候元來我匹夫を立て 君恩上なし年齢既に七十に近し夫を何そやいろくゝと藥に心配すること之有へき手足を縛せられたるかことくに而

縦令十年之世を経るとも太郎歸國之一快事を暫時聞のみ碌々として枯骨之如くにも世に存し上は隠料を費し下々出火其外之時之世話徒人に世話をかけいまたたらずとして醫の説に心を動す命を不知之愚と云へし

○卯五月廿六日 曇七十六度

病床惱苦及三年 嗟嘆半死既屑煙 暗喜精神猶賴舊 贈孫日錄未看顛  
下谷邊酒肆に別手組之人々會津者と及口論別手之方貳人即死貳人深手  
壹人逃去會津には薄手負候ものも無之候由

道淳殿之手向に

四たひまで世を務たる君なればおしなへてみな袖ぬらす哉  
おしまれて雲にかくれし月のかけ獨音になく山ほととぎす  
老か身の病ひし居はほともなく逢まいらせむ死出の山みち

○廿七日 雨七十三度 西洋麻布色如雪且極細密也本邦なら晒最上之ものに遠くまされりされ共一二年過れば寸斷すること敗昏のことしなら晒

は二十年も保つ也西洋人の巧如斯可恐こと也

○廿八日 晴之方七十九度 夕かた花火を兒輩あける万喜兒跡之火を附るをまぢかねてさわくなりけしからぬさとき兒也

○廿九日 晴之方 辰五郎來る月々三十兩之飼葉を賣る今日は拂集に江戸へ出し序也と云さつま上布仙臺平之馬乗袴カンシヤの羽織立派なる事也此節肥し殊之外高直故に以前百文之もの七百文也故に拔荷多し車を引肥取をすればよほと之徳分也と云自由なること也○朱子曰漢高祖唐太宗未可謂之仁人而平定天下致治化豈非仁者之力邪豐太閤獨步千古我輩豈置一辭乎而以文公之此語爲讚詞如何

○六月朔日 微雨曇之方七十四度 昨夕四月朔日附之御宅狀并三月廿七日迄之御日記相届く不相替御用多に民部大輔殿近々英は御越之由相分ル御健之趣何より之大悦也一同いさむ英ノ屬國兵亂之由いかなること有

とも山城帝に随ふと云 皇國之美五世界第一なる可尊之極也

○二日 くもり七十二度 桂城恒庵來る前記別手組會津人と及傷更に不知會津を塾生貳人參り居候か會話なしと前記偽なるへし○貫一叔父の方へ養子に參る由に暇申立る過日其氣さし有いろくと申聞たれと不聞元來無定見人とみえたり横文もやめて劍術遣になる積とみえたり無覺束こと也され共過酒せず夜行せず渠輩亦少し

○三日 くもり七十七度 みなわた入也不時候稻と病人之難義也○四月横濱新聞昏に當時香港に居る日本人谷戸喜三郎書狀を出せりさして之事はなし米ニペーリー先生は戸順叔と有太郎などは大日本布衣以上之御役人也一言一句にても深く慎み遠く慮て万一五世界へ洩日本へ聞おも人々感服する様に心附へし喜三郎之書狀をみて大に恐怖して記ス

○四日 快晴 今朝五ツ時頃迄は六十二度晝飯頃七十四度迄上ル八十度にて天氣つゝかせ度事也米は日本上米三百三十兩位を貳百六七十兩也と

云いまた大玉わたり中也隱居料は七月に至るもしるへからす○貫一跡役江原鎌次郎家來坂井鏡四郎貳十四歳之者來ル相應也上田菊間之母に縁有と云先ツ可也取極候

○五日 晴之方晝七十八度 内藤幸三郎久々に來る昨夜五時今八時まで也珍話なし○鏡四郎親類書爲差出候一類は相應也

○卯六月六日 くもり七十八度 水野若州方は新聞昏之斷申遣ス是は江戸に賣有故也梅干一折遣ス是は先達之日記挨拶也○太田道淳殿事榮隆院道淳日如○竹田斐三郎方は肴一折遣ス是は同人御役替之祝ひ也○成瀬對馬守方へ肴一折遣ス是は前記使者を以菓子折くれ候挨拶也

○七日 折々雨七十六度 午也 フランス人を歩兵差圖役に被召抱葵章之時服も被下候由アメリカ人を横濱運上所へ被召抱格別に御用立候由に付フランスも深閨夢裡人には非ス屈強の者なるへし 皇國昔々秦漢三韓人を御家來に被召仕其内名臣も出しと覺たり近くは 神君韓人を被召仕

忠大居士今  
日法事に付  
代拜として  
泰助遣ス寺  
は谷中本行  
寺也

御譜代御旗本之内に被加たるに其頃之人氣なれば唐人々々と申輕侮いたし追ふ事を生し神君之御不興を受し人もありしと云こと武徳編年之内に見しと覺候御旗本之面々必一段出精して不遠異人の教る様に成へし以前へ夕村に魯人フテナイ船を造りし時日本大工をも雇ひたるに皇國人忽に上達し上大工ト申様なる字の半テンを着せ魯人に差圖いたし候事も目のあたりに有今人もかく有度こと第一は太郎也修行に此心片時も忘るへからず

○八日 曇八十度也 臼井貫一と引替坂井鏡四郎は今日引越○市川弁吉忤來る京地至る靜也太平おとりと唱候事流行之由人氣も穩に成しなるへし○關糺事當時步兵差圖役下役勤方今泉脇太來る

○九日 曇折々雨 昨夜は微暑のけしき有しか今日十字の冷氣に成たり○此節四ッ谷赤坂邊夜分往來殊之外にきやか也これは所々のよせ鳴物入に芝居の如くなるによると云此節上米三百五十兩錢貳朱に付壹文な

るに時候如此然ルに浮たる事に人の錢を費といふは世上有余多き故かはた凶年等之心得なき故か其詳ことは不知

○十日 曇もり七十二度十二 此節六ッ時に起ヒストンのすため夫を夜四ッ時迄書見也食事も麥粥三碗余を喫スされ共手足は如舊きかす尾臺參候節に腹も宜氣分常に不變夫に手足之きかざるは最初に攻撃の不足によるといひていかるのみいかむともすへからず

人もしれ四年に近く足なへてうたて世にふる老か心をこれ實詠也○字にてもかき遊はむと梅堂へ唐番をねたりたるに一枚五分ッ、にて讓くれたりよき昏也梅堂か別段之所置忝し太郎が其事禮を序に申遣し吳候へ

○十一日 曇もり折々雨七十二度十二 來人なし新吉は原田へ逗留也長日之寂寞甚し頂羽本紀をよむ項羽か事を事せしは二十四才也

○十二日 曇もり七十五度 郷原左衛門陸軍奉行並に成○古貳朱金百九



十兩安政貳分判百二十兩之御引替に成錢貳朱に壹文也諸色彌高値に成へし

○十三日 くもり折々雨 小兒めつらしく微邪今日はよしわか顔をみてよく笑ふ也○昨日謹吾來る濕瘡宜近日妻同道に可參と云氣分おち附たり英日記をみれば飛空かことく思ふと云

開成所之御  
人不束有之  
明に相成氣  
しきを動すけ

○卯六月十四日 晴之方八十四度○昨日淺野中書被參候不日に隱居直に剃髮之積暇乞心也と云可惜○服部筑前守を京地もち越之土產來る土瓶茶碗并白粉紅ハンカケ等也ハンカケ壹朱はかり之物かとみしに江戸相場は貳分位之由膽潰し也○今日初る蟬聲有よめはかたひら也

○十五日 快晴九十度 富士秩父之山々迄みゆる此勢ひにて土用中過したし當年作柄万一之事なき様にいのる也○江原左衛門は五千石高に成候由也陸軍奉行並は五千石に御側衆之次也よく承るへし

○十六日 晴之方八十七度 昨日山王祭なれ共並々の神佛縁日位のこと

也三坡へ來り既に八年山王の本祭を不聞國家之多故事説カによるなるへし山王

は新田家格別之神社なることは太平記義貞北國落の前祈之躰に知へし

○十七日 曇八十二度 昨夕雷雨に又々時候惡敷なりしとみゆ嘆々々

○昨日井上信濃守孫同道に來る鶴吉言語其外よろし取廻し並は遙にまされり色白くよき兒也玻璃器のことくおもふ也信濃守最愛實子尤也○

信濃守談話實地に至る其毒氣に當り今日は氣分不出來也初る病後酒一合をのみ其勢に愁陣を破りたり一合之酒貳百三十二文也され共猪口三ツにて十二分之醉を得たり

○十八日 くもり又晴八十七度 昨日白井貫一來る話之様子松平内記之

家來之女合養子に成御家人之株に可買積とみえたりよき先方之躰也○小笠原圖書頭殿を英ミンストル之方へ招キ右に付信濃守も參りたり英人の妻も出る英人之妻を太切にし敬禮をなす君臣之ことく食物等執政よりも第一番に出ス其けしき太郎などは不珍へけれ共風俗の異なるにみなみ

な魂を消候様子也○異人娼家酒肆等の勝手に廻る觸有しに吉原には饒令死罪になるとも外國人には不出と遊女共日本魂を一同に申張に付別に吉原に於異人之參ル場所を仕立其積爲申聞候遊女を抱置度旨願出右に付元來之仕來其外を申立ル信濃守初々委細知しと咄也

○十九日 くもり八十一度 鏡作痔疾押る湯に入わろしよほとこの事也此人今般出府して外出せず酒を止居談話以前之氣力なし大病に至ることもあらむと心配す入湯に參りたるは四五日以前之事也一旦は目くらみたりと云病をおすこと可恐ことなり○昨夕北に當り電光甚敷かりしか日くれ頃少々雷鳴きこゆ雨はなし段々雷強く成外史を十二枚よみ十五枚に至らは休まむとおもふうち余り迅雷也讀書を見合よと云故に仰向に成居るも如何と病をつとめて俯居たるに烈風のことき響にて障子行燈一時にピリ／＼といふかはしめにて雷霆甚し夫々六七度強キか有し也四時に止たりいつれ至る近くに落雷せりと云しか今朝みれば程近キ梯ノ木三ツに折

風はなし電  
か雨かよほ  
との音した  
り勿論甚雨  
に成

たり障子昏に横に筋入たるところみゆ藥取又は買物に參りたるもの共歸り來り四ツ谷麴町所々々落しと云麴町七丁目武家へ落しははつか之隔也と云梯ノ木の外少も別條なし

○卯六月廿日 晴之方八十七度 晝飯に松魚のさしみ麥飯のみにては事不足酒あらはと申たるに猪口に一ツ冷酒を呉たり右に唇を濡せり○此節位牌並之行を修スに敗れ勝也これは行を修し得たるかことし位牌本役といへ共此通なるへし○雷除として野蘭マユにて蚊轡を造たらはエレキテルの氣は十分に可防如何英人に詳に論談いたし候其否御申越可被下候夫に於勘弁有○牛黄ト云藥お万喜のむ也舶來の物漢書によれば犀角之勘考と同じ否御申越相待候拙醫之修行之ためにもなる也○淺田宗伯來る不快此躰ならばよろしと申候尾臺藥違せしにも非るへし

○廿一日 くもり八十四度 謹吾家内同道に於初々參るわれ病氣に付家内を爲逢度旨によりて也○昨夕もよほと之雷雨也一昨日にこりて大に恐

れたり

○廿二日 くもり八十度 四月廿日附英之御宅状来る入齒のことおもへは安し江戸ならば十二兩に出来可申とは不存候牛痘之四十兩驚申候江戸は壹歩か貳歩也右之一條われ世上救ひのためよきことなし置たりとくれく存候○いまた度々之宅状一度も見不被申けしき也くれ可怪日記認候も力なし

○廿三日 くもり之方八十八度 新家大病に浅田熱田之師弟来りいろく論有中氣病もやし馬之世話に出る暑中其外にも客對殊に多し○鍊作之病ひ酒肉にて腸ははやくさりたるけしき也手を束死を待のみ

○廿四日 晴之方八十八度 謹吾来る乗馬五人に兩國に同行逢たるに黒縮緬之羽織に立派なる袴着さんと笠を冠りたるは異國人例之通タン袋之面々は日本人なりしと云

○廿五日 晴之方八十八度也 今年不作ならば大ことなるへきに日々暑

也これにては秋作よかるへし御藏米一昨日は貳百十兩に買人少し昨日は百兩代になるへしと大越云○新家人事不定なり唯酒は不宜もの也これも酒氣有たと云て養花も不呑心に念事残り居るか勿論三十日はかり以前に發病前酒は不呑さりし也

○廿六日 晴之方八十八度 昨日森山多吉郎来る同人外國奉行組頭格被仰付候も今般兵庫開港懸に今日大坂へ向出立之由 上様諸蠻夷に御こととは被下候節多吉なつれも罷出侍坐いたし候由也○新家不快存外に見直したり熱田功彌多也見直候とは不思議と云へし

○廿七日 晴八十八度 支那米小賣百文に付貳合に成候由にも小民共別而悦ふ○新家走馬瘰之症を發し俄に齒三枚落たりかく病類に變を生し而は致方なし

○廿八日 くもり 英之書狀上ヲ封しをみて又吉郎取出しニヒくといひて悦ふ也此兒いまたジ、バ、位之外は物いふこと不能阿万喜はます

〳 伶俐且丈夫也○冷氣也十二時八十一也三四度は昇るへし  
○廿九日 快晴九十度 上田直之進來る當時留役助也○新家大によし走  
馬痺には不成熱田之後見祐庵よりもよし云ことよく當ル淺田は走馬痺と  
申せし也

昭和九年五月二十日印刷  
昭和九年五月廿五日發行

川路聖謨文書第七  
非賣品

不許  
複製

編輯代表者 東京市本郷區駒込東片町三十番地 藤井甚太郎  
發行所 東京市四谷區新堀江町三番地 日本史籍協會代表者  
發行所 東京市京橋區湊町三丁目八番地 早川良吉  
印刷者 東京市四谷區新堀江町三番地 高橋赤次郎  
發行所 日本史籍協會 電話四谷三二八七番 振替東京三九四五番

終